

身延の鶯

泉鏡花作

—

馬車が行き、俵が行く。上りも下りも、日盛に、
がた／＼ぐら／＼、馬ながら、輪ながら、暑さに酔
つて蹠踉けて行く。

陽はじん／＼と灼けて、草いきれの路は煙砂が光
る。——名に負ふ富士川が赤く濁つて、水嵩のど
う／＼と増した、雨霽りの折からとて、道程、其富
士川の渡船場から四十八町と云ふ、身延の本山まで
は、田畑に沿ひ、崖に沿ひ、處々絶崖の急流に臨み
つゝも、陰のない街道を、鐵の箒で掃立てるやうな
馬車、俵に、埃は然まで立たないが、曲んだり、崩
れたり、がつくりと窪んだり、道惡の焼地を、どし
んと揺上げ揺下し、ぐら／＼と引傾く。俵さへ、か
はるのは漸とぐらゐで、馬車となると、遠くから足
場の聊かでも餘裕のある處を見計らつて、一方の、
來て行違ふのを待たなければならぬ。

此處の習慣として、どんな場合でも、渡波の方から靈場へ向つて上る方が、皆乗ものを待たせられる。下りで歸る方は、時間の都合があつて、後れると汽車との聯絡が取れないから、然うした約束があるのださうである。

で、來るのをかはらせて待つ方は、車體を片よせたくらゐでは道が狭いから間に合はない。自棄に何處でも乗開いて、ガタリと片輪を突込むから、水溜では、パツと湯玉のやうな繁吹を跳上げる。其たびに馬車はどしんと躍上つて、―― 六人乗でぎつしりだが、―― 氣の弱い女などは腰掛を迂り落ちて俯伏せになつて、きやつと云ふ騒ぎである。御者は、と見ると、引傾つたとは反對の方へ、背を曲げて、頭をぶら下げたやうに横斜違にぐたりとなる。喘いで續く俾が、突戻された形にガツキと留まる。梶を持堪へた焦たやうな拳から、腕から、垂々と汗が流れる。

處を、すれ／＼に通過ぎる。・・・本山の方からは下りだが、それでも馬も人もぐた／＼にだら

けながら、影ばかりは掌ほどに縮まって抜けて行く。
往つたり、來たり、こんなのが幾組も隨所に目に
着く。

其の間々を、莫塵、笠、または手甲、脚絆で、道
者、行者と云つたのが、金剛杖をついたり、團扇を
腰にさしたりで、早に負けた、夕立雲の斷片のやう
に、ふら／＼と草いきれに漾ひ行く。

いや、何うも暑い。

尤も山國のことである。巖の根を溢れるばかり、
小流の馳る處もある。目の下に碧い水の白く翻る川
へも乗出す。乗通る。．．．然れば、靱草の藤
紫、濃い常夏が紅く咲き、野萩に交つてはつと姥百
合のふくらんだ、山懐、山の腰をも時々は傳ふので
あるが、溪河の流に、其の草の色が映るのさへ、
汗の滲んだ目には宛如、裏長屋の物干から、餘所
の土用干の友染を、ちらりと覗くやうなものである。

「はッ、はッ。」

ともすれば、

「うゝ。」

と呻くやうに、溜息を吐きながら、此の炎天を歩
行く男がある。

焦茶色になつた麥藁帽子を、日を除ける勢もなく、
仰向けに被つた下から、髪を長くして居るのであら
う、ねばつた毛を、耳にも額にもだらりと掛けた、
づんぐり肥つた、年紀は二十六七の・・・・・・
・・・・・・

二

洗ざらしの紺緋の單衣に、薄汚れたセルの袴を穿

き、股立を取つたが、太腹がだぶりとして變に黄んで、何うやら、脚氣でゞもあるらしいのに、じと／＼した紺足袋は、お定りと言つても可からう。

鼻緒の緩んだ薩摩下駄を引摺つたが、袴腰に手拭を提げて居る、と雑と並べたあとへは、些と飛離れるやうだけれど、墨繪の蘭に、何やら題字のある扇子を片手に、襟を寛けて、絶えずのろ／＼と煽ぎながら、歩行きながら、半ば眠るやうに其の手が留まると、

「はッ。」

と言ふ溜息。で、其の毎に、腰の手拭を抜いて、よれ／＼の蛇の死骸のやうな奴で、ぼた／＼沁み出す額の汗を横に扱いて、

「うーむ。」と、唸ると、髪の毛がだらりと又下る。

チヨツ一番、端を張つて、眞中を引扱いて、向顔巻でもすればだのに、矢張りのろ／＼と下駄を引摺る。

引摺り／＼、

「はつ。」

と溜息して、

「うーむ。」と唸る。

そよとの風もない。

最上此の上は、蟹ほどな山蟻でも這出すか、旱田の割目から蚯蚓が昇天でもしない分には、おなじ男が、おなじ道を、おなじ事をして行くより、何うにも書きやうがなくなつた。

眞蒼な蔭が出来た。さして大きくはないが、五七本、杉樹立の暗い根を、爪尖を洗ふばかり、石ころに打撞つて、颯と鳴つて、路傍を一條の流れが馳る處である。

杉の中には白壁が透いて、突端の其の幹のはづれに、藁屋の棲が出て、眞赤な鳳仙花と、おいらん草の咲いた背戸が見える。道は、其處から急角度で一曲りする處に、瀧を灌ぐやうな谿河が覗かれる。

透すかして視みれば、水面すゐめんは目めの前まへに高たかく浮うくが、臨のぞめば、足あしの震ふるふやうな絶壁せつぺきの底そこを、巖いはを裂さく激流げきりうである。來くるまでにも、恚いかうした景色けしきに二三ヶ所しょ出會であつた。が、岸きしからでは、晝顔ひるがほの蔓つるをありつたけ伸のばしても濡ぬらすだけの手ても届とどくまい。却かへつて渴かわを増ますばかりだつたから、

渠かれは腰こしの抜ぬけたやうに、此この路傍みちばたの小川をがはに踞しやがんで、水みづよりは苔こけの青あい、流ながれの石いしに、曲ゆがめた下駄げたを踏ふ掛けかた。ー、這すべつて、踏ふしめて、片足かたあしを突つ支かつて、水すゐ晶やうの根ねを搔かきむしるやうに、兩手りやうてをザブリと突つ込こむと、

「お掛けなさいまし。」
と、片側かたがはから聲こゑを掛かけた。

「寄よつて入いらつしやい、お掛かけなさつて。ー
ビール、サイダア、ラムネ、シトロン、平野水ひらのすゐもございます。」

と、呼よぶばかりでなく、白粉おしろいを塗ぬつて紅あかい襷たすきを掛かけたのが、眞赤まっかなめりんすをひら／＼と、其その片側かたがは

なる、杉苗のやゝ伸びた、低い樹立の下から、馬の間を潜つて出た。

馬の間は可笑いが、五六頭、放飼にしたやうに、のツほりと繋いである。――見た處では、此方の白壁構の農家の厩でもありさうに見えた。が、然うでない。魚類、野菜、藍なんぞ、身延の町は沼津から荷に入れる、其の往還の駄賃馬。……一寸した此處は建場で、此の處からは皆空荷であつた。杉はいまだ幹が弱い、あの大きなのが、一跳ね跳ねると、根ごと抜けさうであるから、すく／＼と手綱を繋ぐ柱が立つて居る。

其の奥に、實は小體な板屋に、葎簾を張出した茶店があつて、……。相場は十三、もんめん巾着捻込んだ、ひぬかの八藏でも、丹波の與作でも、一絞りにしようと云ふ姉さんが、下枝に巢をくつて居たのである。

茶店ちやみせがあつて、サイダ、シトロンが冷ひえて居ゐて、姉ねえさんが駆出かけだして来たきのでは、何なんであらうと袴はかまの男おとこが、それも、（龍神りゅうじんの水みづ）など云いふ札ふだでも立たつて居ゐるなら格別かくべつ、いゝ若いわかものゝ分ぶんとして路傍みちばたの流ながれは飲のみにくかつたらう。

「やあ。」

と、のそりと立たつて、ニンガリと笑わらつて、

「咽喉のどが渴かわいて、目めが眩くらむやうで、何なにも見みえんぢやつたでなあ。」

「お休やすみ遊あそばせ　　—　　貴方あなた。」

「サイダーがあるですか。」

「へい、ございます、・・・・何どうぞ。」

ちよこ／＼と引返ひきかへして、小走こはしりに杉すきの間なかを行ゆくあとを、栗毛くりげも、青あおも、馬うまは、ふツと吹ふく鼻嵐はなあらし。馬士うまかたはと見みると、ごろん／＼、其そのまゝ荷ににして鞍くらに着つけたら、量刃めかたで賣買うりかひが出来できさうな形かたで、いづれも、杉すきの幹みきに背筋せすぢを捻ねぢすたり、腰こしを草くさに摺落すりおとしたり、

足を投出したり、口ばかりは同じやうに、あんぐりと皆寝て居る。

で、六七人の人数だが、どれも草鞋で地に居るから、涼しさうな處に置いた縁臺が二脚空いて居る。唯一脚に――鳥打帽を脱いだのを、額に眞俯向けに附着けたまゝ、腹這ひになつて、諸侯が竹婦人を召した體に、遠慮なく縁臺を縦に引抱いて、長々と突臥した、藍と紺の千條の單衣を膚脱になつて、草臥れた茶無地の角帯を締めた、旅の小商人らしい瘦せたのが一人居た。

枕頭には鬱金木綿の古風呂敷の中くらゐな包が置いてあつて、眞桑瓜を剥いた皮が皿に溢れて堆い、其處で、空いて居る、も一つの縁臺の縁へ、渠は淺く腰を落して、扇ぐるみ、膝まで、ぐんなりと胸を折つて休んだ。

そんなに近く附着きもしなかつたが、渠の袴の影が、旅商人の枕に映つた時、商人は、ひよいと其風呂敷包を傍へ摺らした、此で見ると、――熟く寝

込んだのでは》ないらしい。

「おサイド？」

葭簾から斜正面に言ふ姉さんの顔より、聲より、渠は背後の瓜の皮を、大儀さうにじろりと見た。

「瓜があるねえ。眞桑がよ。」

「へい、上等のございます。」

「あゝ……上等かね。」

「よく冷えて居ますんですが、ぬるくなつたかも知れません。——一寸汲替へて参りますわ。」

と、李もともに瓜を入れた、手桶を片手にツイと起つと、渠はいま畳みはしたが、要の緩んだ扇の先で、陰氣に壓へて、

「やあ、可い、構はんです。構はんです。其のまゝで此方へ下さい。——あ、あ、それも可いです、剥かんでも可いですよ。」

唯、剥掛けた庖丁を、西瓜の箆へトンと置いて、水を切つた眞桑瓜を皿にうけて持つて来る。此の姉

さんが色白の薄彩色で、月夜だと風情になるが、濃い白粉に、きはすみを使つて、浴衣の色もあくどいから、瓜の黄色なのも毒々しい。

腹も空いて居たらう。いきなり、あくりと噛んで、したゝかに頬張つた。……ベツ／＼と皮を吐きつゝ。

「庖丁や小刀の刃を入れるとぢやね、鐵氣が附いて甘くないです。……むゝ、――此奴は其の丸噛りに限るんぢや。……それからぢやね、また餘り度々水を替へて冷すと云ふと、矢張り甘味が抜けるんぢやね。」

立入つた事だが、手桶の水を替へさせないのも、庖丁を使はせないのも、手間を掛けると、あとで幾分か、茶代がと云ふ胸算用が様子におのづから顯れる。

其處で姉さんも横を向いて、「でございますツてね、貴方は眞桑をめしあがるのがお巧者でいらつしやるわ。」

水提灯みづちやうちんの間に釣あひだした、
簷馬つるがチリンと動ふうりんいた。

四

やがて、眞桑瓜を片手に乗せて出て、疊んだ扇の要を返し、張肱して、猪の早太が鷓を刺すと言った形で、ぶり／＼と核を突落す、と汁と一緒に袴の膝に溢れるので、縁臺を離れて、地に踞んだ。

實に、瓜を食ふ通を説いたほどある。扇で核を捌く工合は、鱸にまな箸を使ふ、と思ふ下やら、要に浸みた汁を、口で横撫でに、チエウベロリと吸ふ、大きな唇が一倍厚く、汚れた手を袴になすつたから何にも成らない。

が、漸と聲に元氣が出た。

「姉さん、おい、其の、ぬうと押立つた山が身延かね、本山ですかね。」

「いゝえ。」と寒冷紗の暖簾の中で、かぶりを掉ると、簪が鳴るやうに、簷馬が又チリ／＼と響く。

蝉時雨の音を聞け。．．．流の音を掻消す暑さを、大屏風で圍つて、天を劃つて、溪河の上へ建

てめぐらした峻い峰は、太子ヶ嶽、笈ヶ嶽と云ふのであらう。此の邊甲州の山々には、殆ど目に着く樹と云つてはないから、影もこぼさぬ日盛の草いきれの壁である。

「姉さんは、臉も重さうに、山の高さを仰いで、

「お寺は、まだ、もつと、ずっと前途ですわ。山も違ひますの。総門までもまだ十七八町ありますのよ。」

「……約、まだ半道以上……はあ、あゝ。」と再び欠伸まじりに大溜息を吐いた。

此の時　　「　　パイプパイと響いた。……ぐわたごろ、ぐわたごろ。大概想像でも解る。……杉丸太が蟒に成つて這出したわけではない。上りの馬車を通つたのである。が、通つたと思ふと、

「ど、ど、ど、どう、畜生。」

馬士の一人は、夢を跳飛ばされたやうに晝寐から躍上つて手綱を取つた。……街道に近く杉の

樹に結へた眞黒な馬が、恰も夕立の雲の渦巻く如く、陽の光に光つて、路の眞中へ鼻嵐を噴いて暴出したのであつた。

「あれえ。」

馬車に附着いて續いた俵が、馬を挟んで、がツくり止まると、乗つてた婦が肝を冷して聲を揚げた。

「別嬪だ。」

皆目を覺ました。馬士どもが口々に、

「よ、よ、お萬様。」

「氣の弱えお萬様だあなあ。」

爰にもある、建札が路々、處々に（お萬様）

と云ふのは、身延山中興の大檀那。徳川二代秀忠の側室、紀州頼宜の母儀で、美女の聞え高く、しかも本堂建立の折からは、自ら屋の棟へ上つて、采配を取つて、烏帽子着た番匠等を指揮したと言ふ、潤達な女性で、別に其のお萬の方を開祖とする、本遠寺と云ふのがあると聞く……

砂埃も、騷動も、颯と清流に洗つて鎮まつた時、
突俯して居た件の旅商人風のが、のこ／＼・・・
と云ふべきだが、瘦ぎすで、ぎくしゃく氣取るので
あるから、筋骨が軋むやうに起上つた。

「ほう、跳ねたね、跳ねたね。」

縮の襯衣の肌脱の兩手をぐいと擧げながら、

「跳ねましたねえ、諸君、えらい縁起の可い事だ
すな。縁起の可い處でな、諸君、ほれ、此處にほ
れ。」

と、其枕にあつた風呂敷包を手許へ引いて、最
一度ひよいと手を擧げると、馬を壓へて。口叱言を
言つて居る馬土をはじめ、其の四五人。姉さんも暖
簾から半身を浮いて出れば、――諸君のうちの
人には相違ない、髪の毛の長いセル袴の渠も瓜の缺片を
持つたまゝ、頭のうへに高く伸びた、杉の葉の影の
一寸翳す、商人の脇の下を、仰向けにぼかんと覗く。
「いま貴方がたが、夢に視なさつた、山には黄金、
海の白玉見たやうな、寶ものがほれ、此處におまつ

せ。
「

と、そろ／＼に解^{とき}掛^かける。

「早くからな、御披露しようと思つたけれど、私
 が来た時は貴方がた皆さんで、李の核を握り合つて
 賭博の最中でおましたで。」

と生眞面目な顔して、馬に交つた馬士どもを見廻
 しながら、

「勝つた方も、負けた人も此で得をば取んなは
 れ。」

なはれと云つて、擴げたものは　――

「こら、模様入、上等のナプキンや。俗に皿敷と
 云ふのどすが、卓子臺、膳の上へさいて飾つたら最
 後、忽ち華族方の晚餐どすせ。紙製ではおますが、
 汗取、鼻拭にも持つて来い、洗濯が出来ます。洗濯
 がな。紙で洗濯の出来るのは、まあ、他に類はおま
 へんやろ。さ、．．．．手巾、此は上等、貴婦人
 令嬢持、本麻や。藍の刷繪で花鳥風月とおますわ
 い。――處で．．．．此は又頗る、至極最上等
 の本羽二重、．．．．本羽二重に、かう縁が刺繡

の手巾はんけちどす．．．．．　　ー　　値ねやない、値ねやおま
へん。刺繡ぬいとりだけの手間てまにもならへん。然さうかと云い
て、此これ私わしが叔父おじさんに唯たゞ貰もらうて來きたわけではない
のや。唯たゞ貰もらうたかて冥加みやうがとして、こんな安値やすねで御披ごひろ
露うの出來できるもんやない。よろしか。まあ、見みて見みな
はれ。此この羽は二重ふたへの手觸てびほりと艶つやのよさ。其そのいにしへ、
衣通そとほり姫ひめと申まをすは、これを身みに着つけて居ゐなはつたで膚はだへ
が透すきとほ明とほつたんやな、後光ごくわうが映さします．．．．．一寸ちよつと
頬邊ほつぺたへでも當あてようなら、ヒヤリとして、ツルリ、
トロリの、じゆツ／＼と溶とけますわい。ー　　羽はぶた二
重へ膚はだとは此この事ことや。よう、見みなはれ。．．．．．な、
貰もらひもせにや、盗ぬすみもせいで．．．．．また眞個ほんまの
事ことや、搔か浚さらひ、故買けいづかひ犯かひでないんが、何なんで、そんな安やす
値ねで賣うれるかいなと、此處こゝが肝心かんじんな處ところやわ。ー
こりや一體たいが横濱製はませいの輸出ゆしゆつものや。輸出ゆしゆつものも、上じや
中下段うちげだん々／＼おます、が私わしが此處こゝに御披ごひろする、此これは皆みな
華族くわぞく、豪商がうしやう、紳士向しんしむきのものゝみで、ダスにも一枚まいに
も、そりや吟味ぎんみの上うへに吟味ぎんみをせにやならんものや。處ところ
が、千萬まんと數かずのうちには、絲いとが一すぢ條ぬ抜ぬけたり、小耳こみみ
が一寸ちよつと曲ゆがんだり、毛けほどの疵きずがあると最もうあかんや
ろ、よつて、選えりぬきのあとは、皆みなカン／＼に掛かけて

目方賣りや、よろしかな。それ、何貫匁と云ふ中から、私など小商人が、――恥を言はんと聞えんが――手に入るのは分銅こぼれでひら／＼と風に飛んだ、それこそ拾ひもの同然やよつてに、ほんの絲屑の値で御披露する。よろしかな。正直に疵ものどす、が、手に取つて御覽じろ、顯微鏡でなうてから、貴方がたの目に見えるやうな疵があつたらお目に掛らん。さ、品ものは、まだ幾らもある。・・・・其の上お買ひなさる工合によつては、一目、夢中恍惚たる處の繪葉書を景物と云ふ特典も備へとるで。

「君、君・・・一寸君」

と蟻が這上るやうに、踞んだ肩を縁臺の上へ揺出して、袴の渠が聲を掛けた。

「あゝ、兄さん・・・お待ち遠や、さ、入替つて遣んなさい。」

「は？」

「私が方は、氣長うせんとあかんよつて、中へ挟んで遣んなはれな。」

「は？」

貴方、薬など賣りなはるのと違つたるか。」

「串、……串戯ぢやあない、生々薬館、お

一、二、……串戯ぢやあない。」と、渠は

腕まくりをして、ぬつくり立つて、懐中から出した

雑誌を扇子の平でボンと敲くと、開けた題字が曰く

(歌舞之菩薩) と云ふのであつた。

「僕はな、即ち此の雑誌の記者だぞ。」

さては、歌舞之菩薩の記者か。従つて名も分つた、

渠は熊澤常雄である。

「あゝ私は又……濱で一所に居よつた、臍

臍と、な、此の頃何首烏を賣るお友だちが、よう

貴方に似とるもんやで……えらい、こりや失

禮を。」

「失禮もないですがね、(と苦笑して) 君が

其の風呂敷の奥に持つて居らるゝ、光つた書籍は何

ですか。」

「此どすかい。」

あゝ、其は紅葉先生の「紅葉集」。小形本の一

冊である。

雲の峰に、馬が高く嘶いた。常雄はぎよつとして
退りながら、及腰に撓めて視て、

「は、大先生—— えらい文豪ださうですな。——
愛讀、崇拜をなさるですか。」

「へへへ、（と急にニヤリとして）私も何で
すが、其の、へへへ、情婦が其の、へへへ、貴方も

小説が好きどすかい。」

熊澤は可厭な顔して、

「好きにも嫌ひにも、僕は、えらい難儀をしとる
です。小説なるものゝためにですよ……」

「あゝ、熊澤か、君かい。」

「はづ。」

と言つて、前段の袴が、爰で、座敷の入口にぐつたりと手を支いた。――身延山の山門、石段下の旅館東館の二階、角座敷十疊の真中に、卓子臺を控へて、圓い膝のはだかつた、貸浴衣の大胡坐で居るのは、強雲居士、と云ふ、世態と學問を七分三分に頼張つて、禪を横銜へにした教育家出の書畫屋だが、商人らしい處は更にはない。禪の野狐なるが故に、態度の倨傲な男で、髯も髪も狐色した五十ばかりの、此が雑誌、歌舞之菩薩の發行人、兼社長である。

「唐突ぢやつたなあ　――　まあ、寄れ。」
と、團扇で一つ麾いて、

「取次の下女どもが、熊澤ぢや、面會ぢや言ひをるで、山の坊さんに同姓のがあつて出て來たか思うたわい。君とは薩張氣が着かん。何うしたか。」

「はッ。」

「うむ、何か要件^{えうけん}ぢやらう。何うしたか。急用^{きふよう}には相違^{さうゐ}ないが、わざ／＼此處^{こゝ}まで出て來^きたんは意外^{いぐわい}ぢやよ。」

と其^その意外^{いぐわい}がらるゝ程^{ほど}、熊澤^{くまざは}は、幅^{はば}の廣^{ひろ}い肩^{かた}を、土^{どよ}用の餅^{もち}に搗^ついて、べつたりと叩頭^{おしぎ}、

「えゝ、實^{じつ}は甚^{はなは}だ唐突^{たうたつ}でして、恐縮^{きようしゆく}であります、全く何^{まづた}うも、こゝに止^やむを得^えません事^{こと}が突發^{とつぱつ}をしましたのでして、はい。」

と溜息^{ためいき}とゝもに、勢^{いきほ}ひなく一寸^{ちよつと}句切^{くき}つて、少^ちとばかり膝行^{あざりて}出ると、懷中^{くわいちゆう}から例^{れい}の一束^{たば}ねの雑誌^{ざっし}を引出^{ひきだ}して、

「此^この件^{けん}なのであります。」

「あ、雑誌^{ざっし}が。」

と鼻^{はな}を仰^{あをむ}向けにして上目^{うはめ}を茶色^{ちやいろ}に使^{つか}ふ、苦^{にが}々^{／＼}しい顔色^{がんしよく}である。

「何^どうにも、遣^やり切^きれん事^{こと}が出來^{しゆつた}したのであります。」

「遣り切れん．．．．何が遣り切れん。」
く／＼して居た團扇が、卓子臺の上に鯨子張つて、斜に睨んだ。

「襖一重だ．．．．隣室には客も居る．．．
丁度参詣に出て行つたが．．．遣切れんは穩か
でないな。おい、外聞もあるものだ。印刷所をはじ
めとして、皆相當に手順が運んである。遣切れんや
うな仕事を君に任せて置きはせんではないか。それ
にぢや、今時そんな要領を得ない事を言うて來て何
うするんだ。第一昨日にも發行して、今日あたりは
此處へ雑誌が來るぢやらうと待つて居た處だぞ。う
む、何うも甚だしく不都合ぢやね。」

と言ふうちに、いよ／＼其の不都合な事を、おの
が口について手繰出したと見えて、嵩に掛つて、
「馬鹿な、遣切れるにも、遣切れんにも、いや、
驚いた、此は驚いたぞ。――君、おい君。」

「はッ。」
「何か、いざこざを言つて、其處に捻くつて居る
其奴は、．．．．何だね。――其の様子で見る

と、出来上つた雑誌では勿論ないのだね。」

「何とも、先生。」

此の禪骨を得た骨董屋を、セルは先生と言ふと見える。

「……實に恐縮でありまして。」

「恐縮は此方でするんだ、爲て濟む事ならば

だ。——雑誌は後れる……遣切れん。いや、遣切れんは俺の方だ。……此は驚いた、大變な手違ひに成つた、少からず違却したなあ。」

と疊みかけられるたびに、ハツノゝと息を切つて垂々と汗を流す。

見ても暑さうで、誘はれた強雲も、言の切めを、忙はしく團扇を煽つたが、

「おい、串戯ではないと云ふに、……一
何うしたと云ふのかい。」

「はい。」

「さつさと要領を饒舌り給へ。」

「はい。（と一層重くるしく）……其が、

その、小説の事であるのでして。」

「あゝ、風俗壊亂か。」

「え、まだ其處まで至らんです。」と、言ふ

事が變つて居る。

しかし考へて見ると、第何巻だか知らないが、ただ發行に至らない、所謂「遣切れん。」雑誌である。中にどんな小説があらうとも、風俗壞亂が表面に顯れる理由はない。

「ふむ。」と言つて、強雲は其意を得ながら苦笑した。

「先生も御承知であられます通り、今回、掲載の小説は、志摩子の作、一篇だけなのであります。」

と此處で漸と扇子づかひをはじめた。

また其をもどかしさうに、

「知つとるよ。此處へ來がけに、俺が丁としめ切つて、校正をするばかりにして置いたんだ。――それが何うした。」

「其の校正がออกมาしてからの問題でありまし

て・・・・元來今度の小説は、志摩子が自身に校正をしなければ成らんからと言ふ約束でありましたので、一昨日、其の校正が出ましたのを、早速持つて出向きました。勿論、至急を要します事でありますから、私は印刷所に出張して居りました。其の足で参つたのでありますが、はい。東京は油旱の空が可厭に曇りまして、堪らなく暑かつたのです。午後四時頃に、志摩子の門を敲きますと・・・・」

「おい、君。・・・作者の許に敲くやうな門があるのかね。」

「は、否、門はありません、先生の一寸木臺の御門の如き、奥行はありません。門から直ぐに玄關でありますのでして。」

「第一眞夏の午後四時に、門を敲くには當らんぢやらう。」

「否、はい、此は然しながら言語の形容でありまして・・・・某月某日、某氏の門を敲く・・・・」

とまじ／＼と饒舌る。

「馬鹿な。」

と團扇を打棄つて、

「そんな事は何うでも可い、早く要領を話し給へ、
で、何うしたんだ。」

「女中が取次に出ましたのに、來意を通じますと、
志摩子が自分で玄關へ出て参りましたが、少々お願
ひ申したい事と言ふと、……通されまし
た。……玄關の、狭い處で、面談をいたしま
した。」

「ふむ、苟も俺が經營する歌舞之菩薩の編輯主任
――主任にも何も君一人には一人だが――
玄關で面接は輕んじたものだなあ。」

「否、輕蔑されましても、其は止むを得ません場
合もあります、其時は必ずしも然う云ふ意味では
なかつたのであります。……就きましては、
取敢ず……此處にございます。」

トペイジをだらしなく重ねた中から、一綴の校正

刷を取出さうとするとずる／＼と疊に迂る。

一通り山の風が通つたが、小口を吹煽るほどではなかつた。

「何うか校正を願ひますと言ふと、」置いておいでなさい、晩に見ます。預つて置きます。」と言ひますから――實は至急を要しますので、既に前後とも校正済になつて居りますから。・・・・此處でお待ちいたしますから。「何うも困る。」と云ふのです。雖然、印刷所の都合、従つて発行日の關係がありますからして、是非即刻お願ひ申したい、或は貴下がお読み下さつて、私が訂正をいたしますなり、或は私が読みまして、貴下が御訂正なさいますなり、いづれとも御都合次第と、膝詰で此の校正刷を開いて、紙面と、志摩子の顔とをじろり／＼と見較べて、敢て一歩たりと雖も退きません。

志摩子は、黙つて、にがい顔をして居たのであります、偶と私が印刷面に誤字のあるのを發見しま

した。

原稿の誤謬ですか、印刷の過失ですか、まさに間違うて居るですな。．．．．．で、其私は萬年筆を揮つて、ぐいと棒を引いて訂正をしたのであります。此であります。」

と、疊に押へて、眞桑瓜の汁に染つた太い指で突いて見せた。靈山の麓とて、幸に蠅とも成らず、インキの形が蟻に見える。

處へ、．．．．軒に迫つた草山を、白地の浴衣で、廊下から。．．．．

濡手拭で耳許の汗を押へて、片手で浴衣の襟を取つて、伊達巻も紐もしめない。豊肥した白い胸を遣放しに、紅緒の上草履を蓮葉にばたつかせて、風呂から上つて来た三十二三の年増がある。

「おや、お客様。」

湯の香と、白粉の薫が、もう耳に近い聲音と、もに頸筋へふはりと来たので、小鼻をびく／＼と動かした熊澤が、校正刷からひよいと目を離すと、開放の座敷の入口に其の姿で――甘さうな魚のむしたてに、薄紅をさした御馳走のやうである。

瓜を食った腹をぐうと鳴して、黙つて手を支いて叩頭をした。

此を立身で見、軽く頷いたばかりで、婦は山の影で萌葱色な、其の二階の欄干に手拭を一煽り煽つて掛ける。

其の時、ひら／＼と二つ飛んだ黒い蝶は、高く高
楼に戯れたのではない。向うの山懐の麥畑の眞日向
を練る暑くるしい影であつた。

「何うだ。」

「いゝ湯でしたの、誰も入つて居なくつて。・
・・貴方も何う？」

と、熊澤に、ものを問ひ掛たらしい、其の強雲の
(何うした。) を引取つて、

「御免なさいよ。」

と水紅色をたつぷり見せて、入口のすぐ左側に立
掛けた衣桁の傍に、腰をふつくりと廻して、山に對
しつゝ鏡臺に向つたが、坐る時裾を放したので、半
身は夫れ水紅色のみで、熊澤の横目には、片乳が其
のすつと窪む處まで眞白に、影をほんのりと紅く覗
かれる。

「あゝ暑い。」

と襟を脊筋に抜くかと思ふと、其れなり兩膚を脱
いだのである。圓々として柔滑い、二の腕のくびれ

の浅い、小づくりな婦であつた。

「おい、君ー 其の方が有名な琵琶のお師匠さんだ。山端築野さん・・・それ、雑誌の今度の號に、談話筆記の出て居る方だ。ー 師匠さん、紹介をしますが、其は熊澤と言つて本社の記者です。」

熊澤は、漸と此の時 ー 強雲には、眉毛の濃い、頬の尖つた、看護婦上りだと言ふのに、可恐しくヒステリーな細君のあるのに心着いて ー 彌が上に、どろんとした目を瞞つたのを、だるさうに伏せて、遣直しのお叩頭をした。

「御高名は・・・え。」

「何ういたしましたして、私こそ。」

と、ちぐはぐな、何か會釋をしながら、

「ほゝゝ、うまい態をして失禮ですわね。」

と眉をひよいと上へ上げて、姿見を、覗いたが、

「熊澤さん。」

「は。」と最う名を覚えられたので、手も膝も、もぢ／＼する。

「失禮ついでに、一寸其の手拭を取つて頂

戴。……餘計なことをしたわ、私。……

温泉場なんかぢやあ、一寸欄干に手拭の掛つた處はいゝ風情なもんでせう。……頼まれもしないのに、うつかりと、温泉でもないものをよ。ほゝゝ、それに、こんな風をして、貴方の前を行つたり來たり、裾風が立つてお氣味が悪いわね、ほゝゝ。と、お壺口と言ふので莞爾。

熊澤は勢ひよく廊下へ出た。變な形に、手拭を擴げたまゝ、小鼻を動かして、

「此ですな。」

「憚り様。」

と、つるりと肩へ乗せた形は、東京の婦でなからう。で、もう頸許から髪の毛を繰出すやうに束髪の鬢を搔き、搔き、

「社長さん、……先生い。」と、尻上り

に引張つて、些と訛る。

「あ。」

此も見惚れて居たらしい。

「其處の煽風機を動かして頂きたいわね。こら、

こんな汗。」

と白い腕をだらりと見せる。

「や、此奴、先刻から、くるツとつて動かんぢ

や。」と、強雲は、活禪の一機は此處だ――

團扇で煽風機を颯と搏つ。

今度は築野が、白粉で、長い頸筋を敲きながで、
 「おや、此室のは壊れて居ますか。――然うす
 ると……隣座敷にあるんですがね。」

「有るがね。」と、まだ何だか強雲は、鼻の下
 を伸してばやけて居る。

「取替へたら何う？……熊澤さん、貴方、
 お隣へ行つて取替へて來らつしやいよ。――構ふ
 もんですか。第一、分りやしない。今誰も居ないん
 だから。あゝ、一寸、此方を持つて行かなくつち
 や不可い。憚様――ほう、でも悪くないでせう。
 お隣は女優さんだから、いま居なくたつて。」

琵琶と言ふ音楽家のいひつけで、當代の女優の座
 敷から煽風機をすりかへるのである。袴を穿いた熊
 澤は、人間として一大使命を果す如く、据眼で立つ
 て行く。

小さな聲で、

「泊めるの？ 今夜。」と、築野が一寸眉を顰めて振り向いた。

「う．．．いや、泊めるにしても、安宿へ追放す。」

立入った事だが、此の對話で、二人の間は大抵分る。一つ蚊帳では邪魔になる。別に座敷を調べては不経済だ。故に安宿へ．．．

追放される．．．とは知るまい。大使命を首尾ようした熊澤は、ト西瓜盜賊と言ふ處を、ものだから、透切のある月の模型を抱いたやうに捧げて来た。

「いゝ香ひがしたでせう。」

「は、強烈でした。」

とづんと置く、肩がだらけてニヤリとして、

「薔薇の花園へ入ったやうです。」

「些と暑くるしいわね。でも、早速、其の花園の餘り風ツて處を頂戴しませうか。」

「や、飛ぶ、飛ぶ。」
と、熊澤は、慌て、強雲の此方を摺下つて、校正
刷を両手で壓へた。まともに築野の湯上りの膚へ向
けた一條の風に、疊を浮いて、攪はれさうに成つた
のである。

壓へた中から、光澤紙が一枚、つる／＼と風に誘
はれて、滑稽けた波を打つと、軽く築野の膝に留ま
つた。

其は、しかし、煽風機如きに怯かされて、しどけ
ない婦の膝に寄るべきものではない。雑誌（歌舞
之菩薩）の第一面を飾る筈の寫眞版の佛體で、跌
坐して印を結ばせ給ふ。正面が寫してある。見るか
らに古色の蒼然たる木像である。

蘆の裡から光明が輝いたのでもなく、樹の梢に金
色を放つたのでもない。が、とに角、だしぬけに、
佛が風に乗つて、仰向けにみえたのであるから、此
の落着きすました女樂家も、すつと膝をしめて、水
紅色を細くしたが、

「あら入らつしやい。」

色が黒いのと、白いだけの相違で、其の佛體とおなじやうな、露呈の腕を伸して、刷毛を片手に拾つて見た。

「おや、先生。」

「其ぢや、師匠。——貴女から頼まれたのを、本山に賣込みに來たのは、——寫眞は別に、側背、正面とも參考に持つては來て居る。が、實は雜誌が出來の上に、口繪にしたので見せる方が數段信用を増すのぢやがね。……此の本山に居る、俺の知己が、京都へ旅行をする時日があるし、傍遅れると間に合はんから、四五日の處だけれど太く急いだ譯なんぢやよ。」

原は、築野の夫と言ふのが、本職ではないが、恚うしたものゝ賣買をするので、何處か甲州邊の山寺から、むしくひだらけなのを、馬に積んで持出して、天龍川を船で、東海道を、取寄せたと言ふ。丈六ではないが、可なり大ものなのである。

寫眞版の裏刷には、仔細に時代をしらべて、聞いても驚くやうな古代の巨匠の作銘が記してある、――餘り嘘らしいから、其の記事は此處に省くが、強雲の綴る處である。で、内々だけど、抽象的に記せば、定朝作、虚空藏菩薩としてある。が、實は彌陀の像だと言ふ。しかし、考へても分る、身延で賣込まうと言ふのであるから――

次手だから言ふが、強雲が其の知己だと言ふ、本
 山に有力な役僧某を介して、此の大美術品を賣込
 みに就いて、景品、附録、何だか、其の邊はあいまい
 だけれども、豫め申出でた一俵があつた。

それは、賣買上、決して金銭づくのことではない
 が、東都の樂壇、日本の琵琶界に於て、女性の明星
 と仰がる、山端築野と言ふ美女が、藝道の冥加、ま
 た修行、尚ほ祈願のため、當七面山の什器と承はる、
 白虎の琵琶を拝借して、本堂に於て、夜涼の松風に、
 精進の秘曲を奏したう存じ侍る、と言ふのである。

處が、坊さんたちも知らなかつた。當山奥の院に、
 白虎など、言ふ名器の琵琶があるのか、無いのか
 ー 申條は解つても、第一七面山と言へば、山
 奥上下幾里の難所で、いかに地續きだと言つて、鍵
 を持つて庭へ下りて寶藏を開くやうな次第には行か
 ない。

勿論、之は辭退した事は言ふまでもなからう。何、強雲に言はせると・・・七面山の御堂に、然うした琵琶があるんだか何だか、一向知らない。虚空藏菩薩賣込の餘興に、おなじお座敷を勤めるにして、對手が名にし負ふ靈山の事であるから、恚う言つた方が、築野の藝に勿體が附く。・・・要するに、白虎琵琶が、青龍の琴でも、朱雀の三味線でも、一切平等なのださうである。

然らば、とまた申出た。――然らば美女の妙手が、家藏しまする處の蘆荻と名くる琵琶を以て、御堂に通夜をいたしたう侍ると言ふ。且は、當年世を去つた築野の夫なるものゝ供養に備へたいと言ふのである。

役僧たちが會議した。

琵琶の妙手が、身延山に通夜して、玉釵敲竹の曲をかなづるのである。平家にも源氏にも是は一山のものごたりになる。善惡ともに一大事であるから、千ヶ寺詣が太鼓を叩くのを、庫裡で晝寝をしながら、

うと／＼聞いて居るやうなちよろツかな事には参らぬ。一應、管長貫主の耳に達せずしては、
急に返答も成兼ねる。と成つた。

然らばと、三度強雲から・・・然らば、御許可相成るや否やにつけても、とに角、下しらべ、御見聞として、旅館の榛上に、御下山が願ひたい、と申出た。

之には異議がない、強雲の知己をはじめ、巨樹、鬱林の梢、雲の峰から、麓に下るべき、緋の法衣、紫の袈裟、靴の数まで分つたが、是が今夜に成るか、明日に成るか、返事次第・・・
と言ふ、いま場合なのであつた。

「まあ、先生、社長さん。」
と一度、鏡臺の上に取つた、築野は、佛像の寫眞版を視ながら、膚を入れながら、

「不思議だわね、一寸。」
「何がぢやね。」

「いゝえさ、端ッから此の佛壇の寫眞の顔は、内の夫とよく肖て居ると思つて居ただけ、恚う成つて見ると、餘計肖如なのね、御覽なさい。」

と、衣桁の伊達巻、些と派手な桃色なのをずりりと取ると、其のまゝ占めもしないで、晴の座の衣装を調じた行李の傍をはら／＼と立つて、卓子臺へ――床に餘つた金欄の袋入、即ち蘆荻の琵琶を横にして膝をついた。

「ね、之ですもの。」

「はゝん。」

と強雲は、少く氣のなさゝうな顔色である。

熊澤は額の汗を横撫でして、恐る／＼乗つて出た。

「ほらね、まだ其にをかしなことは――夫さん、年は、年齢を取つた上に身體が弱つて、あの通り、足腰が冷えるんでせう。兩足と膝とへ二個づゝ、腰のまはりへ三つ、腕から脇の下へまた二つ……六月の梅雨だと言ふのに、梅雨びえがするつてんで、電気行火を都合九個。雁だと、ふや／＼と宙へ上り

さうに、骸骨がいこつのイルミネーションと云いつた形かたに抱だいて居ゐたぢやありませんか。・・・御覽ごらんなさい、此この佛様ほとけさまの手足てあしと腰こしの、同おなじ處ところの、同おなじ影かげが隈くまを取とつて同おなじだわね。」

作者は此が怪談でないのを少からず遺憾とす
 る。・・・古もの佛體で一儲しようと思つた
 老夫の死際の状を今見ると、血の冷えた身體に抱いた
 た電気行火の何ヶ處の數の當り所が、阿彌陀様の寫
 眞の手足脇の下の陰影に、そつくり其のまゝだと言
 ふのである。

「ねえ、先生。」

「あゝ。」

「老夫が成佛した證據だわねえ。」

と築野の顔はすましたものである。死んだのが梅
 雨上りだと言ふから、まだ百ヶ日は経つまいに、強
 雲とこんな處に恚して居て、死んだ亭主は成佛をさ
 せられツ了つたらしい。

何、亭主を成佛させるぐらゐは何でもない。此の
 婦の新しい發見だと言ふのを聞けば、爾來何處の家
 でも女中が拂底で難儀をするが、それには養女に貰

つて、娘にして働かせるが可い。それだと給金なしに追廻される上に、手輕に出て行く憂ひがないさうである。現に築野の手許には二人居ると言ふのである。——誰も應じない方が可からう。

「成程、成佛かな。」

と、佛像を横目で見つゝ強雲來はそれでも太い眉に陰を加さした、目を外して、

「で、何うなんぢやい、熊澤、其の件は。」

「は、乳瓜。」

「何？」

先刻の眞桑と、目の前の豊肥したのが胸に充満に成つて居る熊澤は、うっかり饒舌つて、急に眞赤に成つて、

「雷です。」

「何だ、雷だ。」

築野も其時欄干を見た。崖の麥畠で劃られた高廂の間の空は雲の峰も差覗かず、静なほど濃く蒼い。

熊澤は扇の先で膝頭を揉み／＼。

「え、其の何です。．．．志摩子がです、陰氣な可厭な顔をしたのを、或は私が突如萬年筆を揮うてから、字の誤りを訂したのが、癩に觸つたかと思つたですが、．．．狭い玄關で應接をした、それも此も、即ち雷ゆゑであつたですな。．．．ごろ／＼と鳴るです。遠雷ですが、成程鳴りをるです、私が一步も退かないで、即刻の校正を、餘り嚴格に要求したものですから、實は、と志摩子が打明けて言うたのでした。ー此の體裁だから校正處ではない、」と言つて、玄關の襖を半分ほど開けて見せました。斜達の座敷には、蚊帳が釣つてあつて、而も雨戸を閉めて眞暗です。

此の慘憺たる體を見ましては、其上、斷つてとは言惡うございましたので、翌早朝を約しましてからに．．．其の砌、豫て先生からお心着けに成りました（薄謝）の一封を差出しまして。」

「自分の方で薄謝と言ふ奴があるかい。」

と築野を一寸見て苦笑しながら、強雲は卓子臺の上を何もなしに手を圓く掴んで言つたが、

「薄謝・・・」と、つい其の物質的なのが、

性的に變じて出かねない鼻つきで、

「おい、君は薄謝と記くのかい。紙包に・・・・・間抜けぢやないか。それだから俺が堅く然う言つて置いたんだ。」

「そ、それは先生の御命令通り、まさに（御筆代）と認めて置きました。」

「私たちだと（御絲代）と言ふ處だね、一番輕少なものだわね。」

「澤山なんだよ。・・・ふう、それで文句はなからう。」

「あります！ 第一、それから大にあります。何しろ、志摩子の言ふ處の、約十分の一に足りんですからな。」「此は何うしたのです、」と言はれた時には、遍く全身に汗を及ぼしたでしてな

あ……はあ。」

と怯おびえたやうな聲こゑをした。

「ふん、淺あさましい奴やつだな。何なにかい、其その嫌きらひだと言い

ふ雷かみなりの中うちで一封ふうを開あけて見みをつたかい。」

「まさかに、然うでもなかつたですよ。」
 で、熊澤の言ふ處に據つて、其の遣切れなく成つ
 た仔細を綜合すれば恚うである。

歌舞之菩薩の此記者が夕立の中を傘まで借りて内
 へ歸つて、雨が霽つて、其晩は涼しいから可い心持
 に成つた處で、所謂志摩子から速達で葉書が届いて、

「都合これあり御誌へ拙稿の御掲載は斷然お斷り
 申す。」と言ふのであつた。こんなに突張つて堅
 く出たのは、却つて折易いものだから、何、何うに
 か成ると高を括りながら、聊か氣に成らない事もな
 いから、兎に角、翌早朝に出向くと、志摩子に言は
 すれば忙しいさうだが、それとも工面が悪いんだか、
 何だか、不精髭を生しても、雷雨の中とは違つて、
 雲の晴れた顔はして居た。熊澤が其處は記者に必要
 な外交術を用ひて、「先生、」何でも構はない、
 「先生」と奉つて、「意外の御書面でありま
 して、昨夜は一睡もいたしません。」と先づ泣出

しさうに目を擦つて見せると、「眞にお氣の毒で
すが、あれはお斷り申します。」と言ふ。「飛
んでもない雑誌が成立ちません、何かお氣に觸つた
事が、」と探りを入れると、何より「第一お約
束が違ひます。今度のは唯何某として——自分
にも餘り粗末ですから匿名の分にお約束しましたの
に、校正を見ると立派に……いや、此方の名
は立派でなくても、活字に立派に組んであります。」
と言つた。

これは道理で……はじめは他に順おくれに
かさなつた約束もあるし、極暑の折だし、平に起稿
は堪忍をしてくれると言つたのを、熊澤が「腹を
切る」と社長に教つた通りの詭辨を放ち、扇子を
逆にセル袴の下腹へポンと突込んで、「腹を切れ
ば化けて出る。」と……可哀相に、雷に蒼
く成つて震へるほどの臆病作者を威かして、たうと
う働かせて、それでは全くの間に合せだから匿名に
願ひたい、萬止むを得ませんければ遺憾ながら、と
約束して——處で「御稿料」はと聞いた時に、
志摩子が請求した額の、件の、（御筆代）は幾

干か知らぬが、殆ど十分の一だった事は、前段に熊澤が自分で言つた通りなのである。

言ふには及ばぬ。一社では初めから薄謝どころをさへ仕拂ふつもりはなかつたので……こゝに一寸人の氣のつかない事がある。……一面識のない作者の處へ、社から原稿を取りに行くのに、何處で搜したか、作者志摩子其の人の檀那寺、菩提寺の和尚の懇な紹介状を持参した。蓋し心ある人は應用すべきであらう。

雑誌が歌舞之菩薩と題して、天下に宗教と音楽の普宜を趣味的にすると謂ふ看板だから、お寺の坊さんが手助けをするのに不思議はない。また以て強雲の手腕を見るべしである。……

坊さんが木の端、竹の折なら、人には鉋屑か、蛙の干ものゝやうに言はるゝ作者にも、兩親の墓のな
い事はない。「檀那寺の和尚の紹介には、何とも弱つたよ。」と志摩子がまた後に言つたさうである。

さて、處で、……其場合に熊澤が、「何とも恐縮の至りですが、先生のお名前が實は希望なのであります、讀者一般の切望の表現がうつかり記者の意識に暗示を與へますため、お約束にも拘らず、殆ど夢遊病式、盲動的に御署名をいたしました。」と巧い事を――何、内々は活字に成るのを喜ぶんだ、構はず遣了へ、と遣了つたやうな氣振を見せないで、然う言ふと、「其は、改めて匿名に願つても可いとして、昨日御持參に成りましたあの紙包は、」

と、此處で來たから、驚破とばかり、昨日の雷に自若とした熊澤も、之にはさすがに、遍く満身の汗に成りましたなあ。

「志摩子が、（私は先生でも大人でもない、米を買つて食ふ稼人だ。）と潔く言つたですよ。潔く言つたと思ふです――比例に見ればです、たとへば、百圓の處へ、御筆代七圓に過ぎないのでありますからして、なあ。」

「馬鹿な、それぢやから薄謝とも言はんぢやあな
いか。」

「けれども志摩子に見ますればです、なあ。」
「一寸、（しまし、）（しまし、）ツて、

何の事。」

と築野が言った。

「あゝ、近頃の何だ……文士といふ奴ぢ

や。」

と、強雲は魚の異名のやうに言つて退けた。築野が其の言葉の下から、

「それにしても、日ましものやうだわね、しまし／＼ツてさ、一寸。」

對手を撲き下したから、今更ながら御筆代の餘り輕少さに、追思の冷汗を流して居た熊澤も、稍勢ひを盛返すと、扇子も膝に立つて来て、

「で、其の……（でありますからして、決して玉稿料とは申しません。――御酒代、御菓子と言ふすらも憚りまして、御筆代といたしまして、た……何分微力の社中でありますからして、偏に御厚意に絶るのでございます。）と言ひますと、（檀那寺の和尚の紹介で繰廻して働いた、其の勞力を御社に對する厚意だと思つて下さい。食つてる米の代は別に御請求申すんです。）と、志

摩子も、百に對する七に對しては、聊か中腹だつたと見えまして、此方は四則應用の處を、二一天作で眞二つに割りつける勢ですな。―― 恚うなれば、豫々先生の御指導の如く、若狭之助對老怪師直式を用ひて、無暗に拝倒したです。―― 結句、志摩子が「宜しい、（貴方）私に言はれたですな。」

「貴方に向つて腹を立つた、其のあがなひとして酒一升買ひます。お持たせの御筆代……中は見ましたよ。―― 見ましたが、此の包のまゝ、清く貴方に差上げます。」と言ふのでして。

「何うしたい。」

と話を掬ふやうに、強雲は、貸浴衣の大な肩を入れて訊く。

「御先生。―― 此處で、一御の字を使用しました。あつと感極つた顔色をしましてな。（御先生の御氣象では、あつ成程、却つて其の方が潔く入らせられます。では……）と扇子を疊にびたりと置きまして……」

と熊澤は、其時と同じ仕種で、髪をだらりと下げつゝ言つた。

「きれいに速に頂戴しました。――即ち其の金子を旅費にしまして、此地へ出向いて参つたやうな次第でございます。」

「むゝ、要領を得て居る。――はゝゝゝ、其處は、大に要領を得たよ。」

と、口も下腹もぶく／＼と、毛蟹が泡を噴くやうに横笑ひと云ふのを遣る。

「はゝゝはゝ。――ぢやあ、君、それで萬事解決をしたんではないか。……然るにぢや……」

「は、然るにです。潔く一封を放擲したに就きましては、條件があるのです、と云ふのはです。……と同時に、明かに署名を抜いて、何某とだけにして貰ひたい。――と志摩子の云ふのが、此處にございます、此の小説欄です。既に校正と云ふ人

質を取られて居るのであつて見ますれば、最初の約束ではございますし、それでもとは、如何に厚顔に策略を交へ、外交を加へても申されません。よつて確に其の件は請合ひまして、痺れが切れて、立つてよろけるのを合圖に、雙方笑つて、機嫌よく、志摩子も送つて出て、別れました。

處が、處が其の足で、赤坂の活版所に出向きました處が、ですな。見通しの目次の面が最上刷つて紙型に取つてあるのでして、此には、丁度小説の題の下へ、志摩子の署名がしてあるのです。御存じの通り、此を遣直す日に成りますと、經費にも日數にも多大なる損害を來すでありませう。――剩にですな。愈此の志摩子の校正済を、印刷に附する段に成つて見ました處が、十何行ばかり次の頁へはみ出しがありますのでして、此を活かすとなりますると、機械を一臺と、紙を部数だけ餘計に殖さなければ成らないと云ふ羽目に立至つたことを新に発見したものでありますからしてからに、

と息せいで、

「其の、先生の所謂三十棒を啖はす如く、赤イン

キで棒ぼうを引ひいて、約およ其その十なんぎ何やう行をを大上段だいじやうだんてき的にスパツ
と・・・・・切きつたですなあ。」「
と扇子せんすの肱ひぢを突張つゝばつた。

むかしの薩摩つぼの言種ではないが、ぶツた切つたは、切つたとして、目次に歴然と顯した名に對しては、熊澤はさすがに良心に咎められた・・・さうである。

第一、そツくりと・・・言ふほどの金額ではなけれど、一寸頂戴に及んだ一封につけても、相濟まないやうな氣がしたので、今度は、著しく重い足を引摺つて、午後四時頃に、印刷所から三たび志摩子の宅へ出向いた。が、もう此の時は、通された處で、書齋なり、座敷へなり押通るほどの度胸はない。此處で結構と、折から客でもあつたらしかつた志摩子を、上框まで呼出して、格子を片方開けたまゝの逃構で、右の目次の次第を、弱果てた聲で言ふと、お氣の毒だが、それだけは何とかして貰ひたい、眞個お願ひだ。匿名に、と言ふから、「そ、そ、其が出来ますくらゐなら、上り悪い處をお詫には参りません、紙が印刷済に成つて居りますので、其の紙數の處が、三千部刷つて三千枚。」と少々懸値を

すると、「其は餘りに貴方の方が勝手過ぎるだらうと思ふ。紙數だけ刷直すくらゐの事はして下すつて差支へなからう。」と言ふのを、「否、其だけの融通がつかますほどなら、御筆代の處を最う些と差上げる事にも成ります次第で、何分微力な社中でありますから。」と押返す。餘り無責任ではな
いか、社長さんに懸合ひたい、「強雲さんと言ふのは御在社か。」と言つて、屹と成つたから、押留るやうに兩方の手を開いて、當身延へ旅行中だと言ふと、「電話を掛けて下さい……長距離の。」「旅館に電話はありません。」「仕方がない、御足勞だが身延までお出向を願ひます。」と、きつぱりと志摩子が言つた。

が、其のくらゐの事で、此處まで出向いたのではなかつた。

熊澤が、身延へ往復をすると成ると、唯さへ後れて居る發刊が猶ほ此の上にも遲滞するので、「社に取つては非常なる苦痛であります。」と判ると、「此方の苦痛はお察しがないのだ、餘り勝手だ、

勝手になさい。」と言つて、ドシ／＼座敷へ引込んだので、對手が強くなつて撲られないのを僥倖に、一時凌ぎに、まだ水を打たない格子をしめて遁げようとすると、破裂した談判の方から、また玄關へ出向いて来て、志摩子が、「待給へ、いま來合せて居る友人が雑誌を出した経験があるから、其に聞いて當りがついた、我慢も意地も言はないが、それだけの紙の値なら自分で出します。」志摩自身で紙代を拂ふから刷直して貰ひたいと言ふのである。あつと、感極まつた表情をして、「御先生、御氣象では、」と頂戴をしゃうかと、一旦熊澤は思つたが、豫て社長強雲にいひつけられた発行日が大至急の件である。其處を料簡したから、何とも言悪かつたのを、強ひて其儀も「御容赦を願ひたい。」と言ふと、口惜しさうな、未練らしい顔をして、「目次は其處にありますか、見せ給へ。」で、うつかり束の奴を懐から、すらりと出すと、昨夜睨んだ校正だから、小説の組方に見覚えがあつた。――「赤インキは使はなかつた筈だが。」熊澤は吃驚して引込ませようとするのを見つけた。十何行、大上段的にスパツと切つて消した奴だ。

「何うしたんですか。」と語勢が鋭く、顔の色が昨日の雷の時のやうに颯と變つたから、此方も狼狽へて、「決、決して御名聲に觸るやうな削減はいたしません、私が再讀の上、殆ど必要のない部分を打消しました。」と言ふと齊しく、「御名聲ですか、感謝します。其の御名聲にかけても立派に、斷然と御掲載を斷つて見せませう。」とすつくりと立上つた。――

私は式臺へ手をついて、聲を震はし、身を戦かせて謝したです。「あッ御先生――一言もありません、すべて不肖熊澤の失態であります。が、此の失態のゆゑに、御先生の御怒を蒙りまして、それがために、雑誌の發行に差支を生ずるやうな事に成りますと。――今般志を立て、苦學のために上京しまして、此の社の編輯によつて、微細なる報酬を……」

「そりや、各自の頸窪だ。」
と、強雲の團扇は、蚊を打つに髣髴たり。

「えゝ、其の報酬を得て、社に寄食をしまして、晝間は、切々と雑誌のために働きまして、夜分小閑を得て夜學に通ひます。目下の處、此が私の生命なのでございますが、責任上の失策と申しながら、此上にも、雑誌に故障を來しましては、社長の信用を失ひまして、多士濟々の折から、無能小生の如きは、即日にも雇を解かれまして、立所に社を放追をされまず日に成りますと、其時限り、食ふ事も、寝る處もございませぬ、青竹に縋つて故郷へ歸らねば成らぬかと思ひますと、昨日今日、志を立てて遙々と上京しました。其の故郷の父兄、親類。・・・何よりも友人等に、今更合はす面もありません次第で。」と申しました時は、おのづから聲が咽び、臉が熱ツぱく成りました、はい。」

と熊澤は肩を縮めて、首垂れつゝ一息ついて、

「實際、事實失望の結果、唯今御覽なさいます、不肖此形骸も如何成ります事でありませぬか、我なが

「心細うございます。」と罫の入った框の三和土に、袴の引摺るのも構はず、式臺に手を支いて其の心細うございます。」と顔を眞暗にして俯向きますと・・・「お手をお上げなさいまし。」と志摩子が靜に言ふんです。「まことに失禮、私も申過ぎたかも知れません。がしかし私の立場として、唯今まで申しました事に就いては、萬々お察しを願ひます。私は立つ瀬がない。ですが自分立瀬がないと言つて、見す／＼淵に溺るゝとお言ひなされる貴方を、黙つては見て居られません。――では御隨意に。御社の御都合になすつて宜しい・・・お茶も差上げませんで――空が暗く成りました。私は卑怯ものですから、御免下さい。」――此で解決をしましたです。・・・はあ。」

言葉は婉曲にして、然も適切だが、手段は、「腹を切る。」とポンと扇子を突立てるのと殆ど同工異曲である。しかし、其がために、社を追はれて、其日から衣食の道を失ふと言はれたのでは、何とも詮術はなかつたと見える。

處で、作者の身に成つて見ると、忙しくつて、暑くつて、苦い處を、退引の成らない、檀那寺の和尚の紹介のために、辛うじて一編を草して、身分相當の良心ゆゑに、署名を恥ぢて何某分に拘束したのを見事に裏切られたばかりか、少くとも一石の米は買へる筈を、女髪結の祝儀ほどに蹴込まれた上、紙代は償ふから刷直せと言ふ條件さへ、唯兩三日發行の日の後れると言ふ理由のもとに拒絶されて、剩へ其生命とまでは行かないでも、手足の指ぐらゐには思ひさうな編中の章句の十何行をスパツと切つて落されたのである。

「先生……」
熊澤は袴に扇子を突直して、

「退いて考へて見まするに、厘毛、分末たりと雖も、志摩子の言分は立つて居らんです。餘りに氣の毒です。けれどもであります。私が其時、胸に感じましたまゝを申出まして、其に因つて、志摩子の全讓歩を得たのでありますが、先生、雑誌が、もし兩三日遲滞をします場合にです。先生は、果して、私

を解雇放逐をなされるでありませうか。正に其通り
としますれば、私の目下の境遇として、背に腹は替
へられません。志摩子に全譲歩をさせた事に、潔く
安じ得ます。が、もしやです。先生に幾分の御寛恕
がございまして、一言のお叱りぐらゐで済むものと
しますると、餘りに志摩子に言譯がないのです。此
の事につきまして、聊か良心の苛責を感じて、轉輾
反則の懊惱に堪へませんので、實は、其の事
を……其一應伺ひに上りました次第なのでご
ざいます。」

と、ぼやけながらも思ひ入った體なのに、強雲は
事もなげな顔をして、

「何だ、そんな事で、……馬鹿な、第一雑
誌は何うしたんだ。」

と聲が激しい。

「其は全部、校正の手を放しまして、製本の出来
るまでにして参りましたから、後れる事はないので
すが。」

「当たり前だ、当たり前ぢやないか。」 「は」

「志摩子は何ぢやい、商機が大事だ。おくれりや、
おまへは放逐だ。」

「おや、日ましものが歸つて来た……」

と、裏窓に頼杖して、本山の森を仰向けに見て居た
築野が、けだるさうに呟いた。

他の事は、餘りよく言ひさうもない婦だし、場合の様子が、女優の一行の下山する處を、窓から遠く、森越にちら／＼と視たらしい。

築野は、打棄るやうな怠けた調子で、

「一寸それにしても、しまし、しましは氣がないわね。渾名なの、其の作者の。……。其とも自分でつけたんですか。何とか着けやうがありさうなものぢやあないの。」

熊澤はもの思ふ體で黙つて居た。

「此方で勝手に呼ぶんぢやよ。志摩的と言ふも同じ意味ぢや。志摩は姓なんでね、名は慶吉と言ふ奴ぢや。」

「あら、慶吉。——志摩……」

と、此の婦にしては發機んだ聲で、もとの座へ居直るのに、博多の伊達巻が色も緋に冴えてギウと鳴

った。

「ぢやあ、慶ちゃんだ。――三國（越前）の人でせう。」

熊澤は思ひ懸けず目を睜つた。が、強雲も少なからず事の意外な顔をした。種々意味で、大安値の御筆代に扱つた作者を、築野が、併も「慶ちゃん。」は、穏かでないのである。

「やあ、師匠。」

「御存じで。」と熊澤も喘ぐやうに言ふ。

「從弟よ――私のさ。」

と言つた時は、もう柔かに、くの字に成つた。此で見ると、志摩子の待遇に對して、何等反抗の意氣が見えない。

強雲は安んじて、とに角巻蓑を大吹しに吹したのである。が、煙の中に厭味な笑を漾はせた。

「奇遇ぢやなあ、師匠。しかし、いとこ同士で、
一戀、鴨の肉と云ふ奴を味はうた中ではないですか
い。」

「止しても頂戴、あんな書生坊を何うするもので
すかよ。でも従弟にやあ違ひない。眞個に燈臺もと
暗しだよ。……尤も久しく遭ひませんが
ね。……然う言へば、時々、新聞や雑誌なん
かに慶ちゃんの名で書いたものを見掛はするんです
がね。……何うせ、あんな人の書いたんだ。浮
世も人情も、何、分るものかと思つて、覗き讀みに
も讀んで見た事もないんですが——先刻からの
話は、へい、慶ちゃんの事なの。水芋を食べて嬉し
がつて居た癖に、へい、然うなの。……米を買
つて食ふ稼人だなんて、そんな事を言つてる
の。……此の高價さに、白米が買へるのか知
ら。精々三等米に挽割麥ぐらゐな處でせうね。……
・・稼いだつて。」

「いや、しかし相當には遣つとるやうです。」
と熊澤が出す口を、強雲が引取つて、

「とに角、私が社で、雑誌の呼びものに利用するぐらゐな事はあるんぢやよ。仕事をさせる時だけは、間違つても先生扱ぢやね。はあ、師匠は、何かい。其の作者が芋を嚙つてた事を御存じかい。」

「芋、結構……然も私が煮て食べさせたんですものね。」

「恐れるぞ！」

と度外れな高笑ひをして、猪首を縮めたが、併も満面惟得意で、

「芋、即ち鴨の味ぢやらうがね。」

「鴨どころですか、あの兒にや鶴の羹さ。」

と圓い手で巻苳を取つて、

「……雲の降る晩だつたわね——北國は寒い事よ。暖いものも食べられない貧乏人の息子ですからね。——いゝえ。」

と片手で、何とか落雁を一寸撮んで、一方には苳を吸つて、茶でも汲まないか、と言ふ斜視を熊澤に向けながら、

「強雲さん。」

「おゝ。」と、大きな返事をする。

「……何も彼も御存じだから構はな

い。……恥を言はなけりや分らないんですが

ね、其の頃私が藝妓をやめて、あの土地で、此の間

の夫さん。」

と言ふ……此の間まで生きて居たのが、既に成佛させられた年よつた夫の事で。

「夫さんのさね、……世話に成つて居た妾宅へ、慶ちゃん、しよぼ／＼来た事があつたんですのさ。」

「小遣がなけりや　――　矢張り、友達もないも
 んだから、心細がつて、．．．．寂しさに．．．
 ・其の慶ちゃんの志摩子がさ。――　いとこの私
 達を可懐しがつて訪寄るてツた形なんでしたかね服
 装は悪し、しよびたれてるし、それだから陰気だし、
 私は餘り嬉しくなかつた。氣も合ない。其處へ行く
 と、近まはりの蘆原の温泉に藝妓をして居た私の姉
 ー　姉も然うなの　ー　二人とも散々です。」

もと／＼志摩の慶ちゃんの家も、山端の築野の一
 家も、出は東京なのださうである。．．．．築野
 の父親の方が、斯道に心得があつた處から、越路蘆
 原の片邊に、清新で而も良質だと言ふ土を發見して、
 遠くは有馬、隣國の九谷なんぞを凌駕する色繪の名
 陶器を製造すべき、計畫も準備も整つた處から、妹
 婿で一寸した畫工だつた、志摩の父親を誘つて、二
 軒とも前後して、移り住んで、大竈を起したのが、
 年月雨風の中に煙になつて、残つたものは借金と灰
 ばかり。山端の姉妹は褌を取る。男の兒は尻を端折

つても錢にはならない。志摩の親の方は、貼紙だの提灯の繪だのを書いて三國の裏町に幽に暮した。瀬戸もの少々は、並べて商つても居ただけれど、此は數ふるほどもなく目にも立たなかつたから、小商人の息子株にも入らないで、通稱提灯屋の慶ちやんであつたと言ふ……

「でね、姉とは、それはノ、氣が合つて、仲よしだつたんですの。柄を見て、縫直しもの一枚も着せて遣れば、少しは小遣も持たせるし、二人とも小説が好きでね、山家の温泉場の貸本で間に合はないものは、姉が工面をしては慶ちゃんのに買つて遣つたんです。珊瑚の簪の一本ぐらゐは抜いた事もあるでせうよ。」

とダイヤのピンに軽く觸つて、吸殻を投げたが、

「ト何でしたつけ、然うノ、雲の晩に、どゞつと東尋坊の海の鳴る暗の中を、びしよノと破れ傘で、泣いたやうに襟を濡して訪ねて来たから、火鉢へ掛けて、芋を煮て、冷飯にまぜて、ふかして

さ・・・ふつ／＼湯氣の立つのを食べさしたら、
姉さんが自分で拵へて、こんなお旨い事はない、御
深切、山海の珍味だつて、十四五の少年がよ。・
・本で覺えたやうな口上を言つて、がつ／＼し
て食べたつけ。――一寸きまこうだつたわね。蠅
帳には、夫が通つて、寢酒に撮むほどの雲丹も海鼠
腸もあるんだけれど、腹に溜らないものは職過ぎる
し、井を取つて奢るほどの客ではないから、安上り
でごまかしたものを、金量より、深切でした事と思
つて居るのさ。――情愛と經濟を、自分勝手に取
違へるやうな料簡で、どんな小説を書くんだら
う、――一寸お見せなさいな。・・・其處にあ
るんですか。」

「はあ。」

「その慶ちゃんの書いたものが。」

「此に。」

と熊澤が、ずつと出る。

今度は強雲が頬杖で、

「十何行、すぱつと切つて落した奴ぢやな。」

「は、朱ですから、下が透いて、読めば読めま
す。」

「どうせ、拾讀よ。」

で、すぐには見もせず、煽風機の風を孕んだ校正
刷で、二つばかり胸を煽いで、パツと香水を薫らせ
た。

「拾讀と言へばね、――其の晩、慶ちゃんが汚
れくさつた襟の下に、光つた讀物を持つて居るから、
誰の、と聞くと、紅葉先生のだと言ふんでせう。其
の子も姉も、神様のやうに思つて居るんだし、其の
先生のなら、私だつて――」お讀みよ、讀んで
お聞かせよ。」と炬燵の友染を鼻で壓へて、すつ
ぽりと裙まで入ると、あの邊では、お妾がする／＼
と曳いて居ました。慶ちゃんは其の炬燵へは中りも
しないで、畏まつて……色の白い子で、髪が
お小僧さんだから、お寺の新發意が御經を持つたや
うにして讀んだんですがね。」

「読みはじめたのが——忘れもしません。」

（むき玉子）と言ふんですがね……一寸聞

きかける、つい面白いもんだから恍惚して皆に聞いて、炬燵の火はよし、緋手絡かなんかの、其の時分、前髪も鬢も、しつとりと汗になつたんですのさ。——

中に、をかしくつて、今も覚えて居るのは、蘭谿さんと言ふ洋畫の先生が、きれいな、おとなしい、生娘を全裸體のモデルにして、青い柳の下に、眞白な行水の女を！」

「ふう。」

「はゝあ。」

と熊澤も膝を揺る。

「……でね、（時ならぬ雪一團！埋れぬ紅梅の蒼と見しは、わづかに色づける乳房。）と言ふ、目の覚めるやうなのを上野の展覽會へ出して、大評判に成つたのを、蘭谿先生の、舊藩主の御隠居と言ふ好色ものが、モデルに成つた娘が、先生の内に居る事を嗅ぎつけて、重籐の杖を突張つて妾に摘

出しに、家來をつれて押して来るツて次第なんです
がね。もう玄關から、（ごぼ／＼と喘きながら。）
と言ふんです。――（老公言語の中にごぼ／＼
と咳嗽を調合ひ。）――（天晴々々、ごぼ／＼
と又咳入る）でせう。（風にいためる花の姿、
濃麗なる奇觀なるべしと太鼓拍てば、老公ごぼり、
ごぼり。）と、一生懸命に慶ちやんが讀めば讀む
ほど、私は可笑くつて堪らない。困つたわね、おや
／＼、まあ、あれ情ない。― なんのツて言はずに
や居られなかつたの。―― つてものは・・・。
やがて、今夜あたりは腰を暖めにお出で遊ばす、雲
の傘、小田原提灯。―― 宵に湯に遣つた、女中が
長湯だから、横町の角あたりで、同じく提灯で歸る
のに出撞すと、節儉家だから、一つは消して、一所
に遣つて来るだらうと思ふ夫さんが、此の間死んだ
時も老夫さんだつたけれど、もう、其の時から老
夫さんでせう。―― それ、格子戸から、ごぼ／＼
と喘きながらで、太う冷えるのと、そらね、老公ご
ぼり／＼・・・びつたり暖めると、續け状にご
ぼ／＼ごぼ、背中をさするやうにして、一寸徒に脇
の下を擦ると、込上げて老公、ごぼ／＼ごぼなんだ

もの。……其を思つたもんですからね。」

「怪しからん、澤山だ。」

「太く又蒸すですなあ。」

と煽風機の筋に外れた熊澤は、大汗をかいて言ふ。

「あゝ、縁側でお涼みなさい、餘程涼しいから。」

と食つたもので、

「どれ、拝見をしませうかね。」

「次手に讀んで聞かしてくれては何うかね、屹と

師匠は旨からう。」

「鶏を割くに何とかツて、琵琶唄の章句にあるわ

ね。」

「少々御免を蒙りますで。」

と熊澤が座敷を直角に出ようとすると、階子段から、廊下へ續いて、四五人の聲音に、媚かしい衣摺れが、さら／＼と交つたばかりか、得ならぬ薫が襲つたので、ひよろりと退つて、二三度うる／＼して、のそりと出た。

「あゝ、これですね、志摩慶喜を、なにがし
と。……題は、除蟲菊……場末の荒も
の屋にありさうだ。」

綴がやはゆゑ、ばら／＼と亂れる處を、ダイヤの
ピンで、スツと留めて、

「光榮だと、お思ひなさい。」

「どれ承はらう。一寸聞かれるやうなら退屈凌ぎ
ぢや……。睡く成るやうなら、今のうち晝寢を
して置く……。爰が活氣ぢや、喝！」
と言つて、俵を轉がすやうに、ごろんと寝た。

欄干に片肱で、熊澤はぐたりと成る。

築野がこれから讀んだのである。が、はじめのう
ちは、隣室へも聞えるやうに、聊か聲繕ひもしたッ
けが、其のうち強雲はうと／＼するし、張合もない
から黙讀した。……勿論、面倒な處は飛ばし
たので、其のまゝだと、きれ／＼に成るから、こゝ
に其の除蟲菊一編を轉載する。

言ふまでもないが、短篇で、校正ずりが八九ペー
ジ、讀むのに二十分もかゝらなかつたのである。け
れども、其のまゝ筆記すると、――此の見當では
少々續く。・・・・

お目まだるい處は御海恕を仰ぎたい。

除蟲菊 志摩慶吉

さて其の一編である。

「何だね、まるで身の上話ぢやないか。」

と、二三行讀んだと思ふと、築野は投げるやうに
言つたのであるが　――

除蟲菊
ぢよちうぎく

かぞへ年の三十三は、女の厄年だと言ふ。・・・
・男に係りはなさうだと思つたが、然うでない。
一 昨年の夏は今考へても慄然とする、其の三十三を、
三ならびで、俗にさん／＼だと擔ぐとほり、まことに
私はさん／＼であつた。尤も作者と言ふ家業は、
筆の上ではあるが、毎日のやうに、女の身振や聲を
使ふ、紅も使へば白粉も使ふ。別して當時は洗髪に
水白粉ぐらゐでは追附かないから、牡丹刷で固練を
用ひ、梅ヶ香ほんのりとする處を、薔薇の薫が芬と
遣る。・・・言つた形で、而も美人を、寫して
至らざる時は、自分が美人であればと思ふばかりで、
箇所々々の起居では、袖などは思はず姿態をする次
第だから、自然と幾分か女の血が交らないとは限ら

ない。

餘計な事だが、それか、あらぬか、で、女の厄年にさん／＼であつた。

可訝なもので、其のさん／＼が最う前の年の暮からはじまつた。「餅の代に一つお稼ぎ下さい。」と一雑誌の編輯員が好意で然う言つてくれたので、精々と稼いで、漸と仕上げたのが師走も押詰つてからだつたが、恚うした時は氣が急くから、電車で可い處を俾で飛ばして、社へ行つて、其の編輯員に逢はうとすると、不在だと一言ふ。落膽した。

が、満更知らない仲でもなかつたから、其の社の編輯長の某氏を呼んで、應接室で逢つて、次第を話すと、その編輯員は、當日不在ばかりではない。暮に退社して了つて、社と關係はなく成つたのださうである。はつと當惑して、最早少々ふるへの來た手で、右の原稿を恐る／＼差出すと、一寸手には取つたが、張腕でボンと二つばかり、小口を敲きながら、「目下大輻輳でしたなあ。」と眉を顰めて言つ

た。――ハツとする處へ、附け足して、「前編輯はお約束したでせうが、言置がないから引繼ぎのしやうがありません。それに今度からは、すべて材料を精練しますから。」と言つて、ついと突戻すと、折から洋行歸りで、ぱり／＼言もはせて居た此の編輯長は、スタイルの新しい洋服の肱を突張つて、金時計を。パチンと鳴した。取りつく島もない。尤も洋行歸りの威に感じて、ふるへの来るやうな餅の代の原稿では、必ずしも精練されたものではないから、包みを解いた袱紗にも極りが悪い。何、古新聞に引包んでも可いのだけれど、

世に出た時の幸先を祝つた、めでたい模様にも恥かしく、すご／＼と引込めると「今後は御依頼申さない原稿は、何うかお持込みのないやうに」――と言つて、ずかりと起つた。口惜いのを通越して情なく成つたのは言ふまでもなからう。重荷に小附の、其の俾をすぐに走らせて、前編輯員の家へ駈着けると、息せいて玄關へ飛込んだが、又不在だ。剩へ旅行したと言ふのであつた。

暮から然うした不出來しが累り累り、押せ／＼に、眞夏に成つた。其の間には、短篇を集めて一冊にすると言ふ相談があるから、泳ぐやうにして乗出すと、川の眞中で覆へる。……師走の話のつゞきだから、何だか寶船と取組合をするやうに聞えるが然うではないので、讀者方には何の事だかお解りには成るまいけれども、出版元へ前借を申込んでお斷りを食つたことを言ふのである。まだ其は可いとして、一冊が出来あがつてから、三度四度と稿料を刻まれて、而も受取るのにお百度を踏まされる。知りもしない雑誌に、「なにがしは本誌のために目下汗と膏を流しつゝ稿を起し居れり。」と薄汚く豫告されて、まだ櫻の咲く頃だ……。貧乏しても錢湯にや行くんだから、汗は出さうと、膏は流さないと、獨り憤りはしたものの、先づ一ツ口にありついたらと、卑しい料簡に引かされて、いつお約束をしましたかと、言ふのを機掛に其の社へ談を持掛けると、「申おくれました、之から御相談をいたします、本社のために大努力をなされて、一大傑作を願ひたい。」と言ふに就いて、仕事欲しさの悲しさに、汗も膏も流しませうと、涙の流れさうな弱い音を出

い。．．．．．
して、さてお手^{てあて}當はと、來^くると、
肝^{きも}を冷^{ひや}すほど安^{やす}價^す

(除蟲菊のつゞき) 其うちに久しく打絶えた男
 で、近來は演劇の方へ關係して、某小劇場の脚本部
 に入つて居ると聞いたのが珍しく訪ねて見えた。――
 作者としての地位は、餘りよくないのだ、とか噂
 したが、服装は好い。・・・單衣の小紋で洒落
 れた帶で、男振もまた好く成つた。

やあ、お珍しい、何しろ一杯と言ふ處だけれど、
 おいそれと間に合ふやうな勝手向ではないから、番
 茶などを獻じて居ると、其の男も、こんな許に長居
 をする氣はないので。・・・早速要談に掛つた
 ー 話と言ふのは、私が前に書いたものを、今
 度其の座で、舞臺に掛けようとするに就いて、承諾
 を得に來たのである。實際の處、場末過ぎて、餘り
 嬉しくはないのだから、如何なものかと、胸に手を
 置くべき處だけれど、ありやうは質ばかり置いて居
 るのだから、そんな餘裕は更にない。幾千金の脚本
 料にはありつくと思ふので、いやお見出しに預りま
 したかと、之で番茶だけでは厚顔しいほどな挨拶を

して、虚飾なしに畏まると・・・中に、祭禮の
場面で、萬燈賣の爺さんを、唯景色だけに使った處
がある。あの爺さんを以前新粉細工の上手があつた
やうに、萬燈製造の名人氣質の爺にして、氣に入ら
ない奴には賣らねえヨ）とか何とか威張らせて、
藝妓を連れた、成金の相場師と、恚う取組合の喧嘩
を押はじめさせる筈です、と手眞似で話す・・・

新粉細工の達者な爺さんや、砂がきのあくたれ媼
さんは別として、萬燈屋の名人は些と怪しい・・・
・・・それに、眞晝間だと言ふのに、藝妓を連れて、
のそ／＼歩く成金も變ではないか知ら・・・第
一藝妓が萬燈を振るのも奇抜だと、言はせも果てず、
其處が江戸兒です、一葉女史の（丈くらべ）の
翠の意氣で、と、飛んでもない、他人様のものまで
穿違へに持出して、其でなくては此の演劇は出來な
いと言ふ。

弱つたーが破談に成つてはならないから、
（丈くらべ）の翠は泥草鞋を投げつけられる方
で、萬燈を振廻すのは横町組ですよと、他人様の迷

惑に成らないだけの注意を静として、先づ納まる
と、—— 今度は……大分面倒だ。

あはれな、艶な竄れた妾の、男に虐げられるのを、
同じ運命で世を果敢うした、むかし諸侯の妾の精靈
が幻に顯れて助けると言ふ—— 一體大甘もので
さあ—— と其時の其の男も言つたが、いや何う
も、恚う書いて居ても些と甘過ぎる。……暑
さは暑し、お話するに、—— 一先づ汗でも拭かう。

處で、其のお化の妾が、猫を可愛がつた因縁で、
虐げられる妾の家のまはりで時々猫の啼聲がする話
なのである。が演劇には、いよ／＼精靈の顯れる處
は、おばけの妾は、もの凄いほどの美人に仕立て、
前後に附添ふ、腰元は、振袖を斑に染めて、一人々々
に無地と鹿の子の紅い狎ころ掛を結ばせて、ずらり
と舞臺へ並べると言ふ。

之には私が吃驚すると、いや、顔は猫にはしませ
んと、澄して居た。顔は猫にしないで、腰元が紅
い首玉を結んで、斑の振袖では、誰が見ても是、絞

の浴衣で猫ぢや／＼とおつしやいます、と場末の藝妓が宣傳とかを踊るやうだと、自分が汗の浴衣につけても、少からず異議を唱へた處が、其でないといふ見物が承知しません、受けません。と言つて肯じない。

演劇が出来ず、見物が承知しないのでは、まるで相談に成らないのであるから、右兩様とも兎も角も泣寝入をした處で、いづれ招待券を差上げます、御覽下さい、衣裳や道具は張込みましたよ、と言つて、最上立たうとする。

私はトボンとした。

衣裳と道具は張り込んで、招待券は超越すとして、未だ一言も其の臺本に對する報酬に及んで居ない。

いや、くどい。．．．．早い處が、顔を立てるの、何のと言つたが、強ひて少額を要求すると、止むを得ず、そんなら座主と相談をすと言つて歸つたきり．．．．沙汰なし。ー お庇で、萬燈の喧嘩もなく赤い狎ころ掛の腰元も出ないで済んだ。

二十一

(除蟲菊のつゞき) ー ー けれども、濟まぬは作者、私の胸で、何うせ、一錢にも成らないほどなら、何故あの時、痩せたりと雖も大胡坐で踏反つて、不可え、と言はなかつたらうと思ふ。・・・と泣きたくなる。

然うかと思へば、泣くより笑ひと言ふのが、まだある。ー ー 空腹を抱へた爲う事なしの散歩歸りの晩方に、おなじやうに下腹にこたへのないのが、屈腰でよぼ／＼と、背中へ大行燈を背負つたのやら、藍染の旗を擔いだのやら、太鼓も、ちやるめらも、樂隊の音を潜めて、寂として、六人ばかりの一行が、老年ばかりで悄乎として、とぼ／＼と廣い坂を上つて行くのにすれ違つた。梅雨時の、分けて陰氣なた

そがれの空へ、坂を上つて行くのだから、遠くへ消えて行きさうに見えた。下へ下りるのだと、町並だから、消してあつても、行燈に灯が点くやうに見えたらうに。

此は活動寫眞の廣告で、古映畫の脱穀が徘徊つて通る趣があつた……ばかりなら可い、——其の行燈にも、旗にも、大字で染出したのは、何を隠さう、私の小さな作の題である——而も編中の女主人公の名が其のまゝ題に成つて居るのである。處を、此の體は、さながら女の葬禮が通つたやうで、悲曲の結末には編中の主人たちを、我が手に掛けて自殺させるぐらゐは遣兼ねない、不心得な作者も、此には少からず可哀を感じて、坂の下に思はず涙ぐんでゐんだ。

實は麻布邊の坂の途中で見たのであつた。今でも、その坂を魔所のやうに思ふ……心ある賢者、哲人だと、こゝらで無常を觀じて坊主に成る處だけれど、下根の凡俗と來て居るから此處に於て、餘計にげつそりと腹が空いて、六欲煩惱一齊に、恰も熱

爛の酒の香の如くむら／＼と起つた。

某會社撮影と、且つ廣告行燈に記した。其の會社からは、原作に對して何の交渉も受けて居ない。言はず無斷撮影である。……尤も、別の或會社には、それよりして六七年も前に、一つ鍋のものを突いた友人から、嘘か、眞個か知らないけれども、此の頃の、時の相場だ、つき合ひ給へと言ふので、四合鑊二本と、一封、十圓也で、納得させられて、承引したものに相違ない。

が、いま見たのは會社が違ふ。――しかし……あゝ、あの當時でさへ、作者が酒二本と、金十圓也を着服したばかりに、編中の女主人公は、恰も身賣同然の體で、何うかすると、場末の四辻や、裏町の土塀の貼紙に――無慙や、脛も露出な紅い蹴出しを大路の風に曝されたり、頬邊を垣の柵で突かれたり、髪も袖もぐしよ／＼と時雨に濡れたりして居たものだつけ――彼處へ坂の上へ迷つて行くのも、いつか、其の幽靈が出たのかとも、思つたが。……智慧は淺し、慾心は深い。

翌日、早速其の某會社へ出向いて、要途の事務員に面會を求めると、何の用かと、膠もなく甘ふのを、其の映画の原作者だと小聲に名乗つて、僅に應接室の椅子へ通されたが、待たせること、やゝ多時。つゆじけで下腹が疼み出して、顔色の蒼しよびれた處へ、てら／＼と顔の光澤の可い、結城縞のしやんとしたのが出て来て、

「おいでなさい。——映画が何うかいたしましたか。」

と、のつけに當身を食はされた、もう見苦しく息がはずんで、掠れ聲して、其の無斷の由を詰る。……とは行かない、恐れながら伺ふと——

「いや、あれは、……某會社から當社の方で買取つたものですよ。貴方が承諾しなかつた一通も添へてあります。……何うもね、所々へ間塞げに出しては居ますが、雨だれ澤山、透切れだらけの持餘しものでありますな。」

其の言に、此方は力及ばぬと、蟻螂の如く、嚇と成つて、透切だらけの持餘しものを興行される迷惑

を一談^{だん}すると・・・

「撤回^{てつくわい}は望^{のぞ}む處^{ところ}です。しかし金子^{かねこ}で買^かつたもので
すからな。・・・何^{なん}なら貴^{あなた}方^{かた}がお買^{かひ}戻^{もと}しを願^{ねが}ひ
ませうかね。」

えらい！・・・言^いふことがきびくして居^ゐる。

(除蟲菊のつゞき) ー 敵ながら、人間が活きて居る。社からは嘸ぞ好い給金を出すであらう。あつぱれ也と、まだ其でも、捨鞭を打つて遁げしなに歌を詠むほどの負惜みもあつたものだけれど、苦さもどんづまりの、暑さの頂上には、もはや討死をするかと思つた。

其の頃は、吐瀉をする可厭な病が世間に流行つた。

一日、某 ー 新聞編輯員と、肩書のある名刺を、女房が取次いで。ー 逢つて見ると、身勝手だから讚めて言ふではないが、行儀の整つた、まことに柔和な人で、お忙しい中であらうが、社の紙上で凡そ百回見當で、續きものを願ひたいと思ふが何うであらうと申出られた。私は武者震をするほど嬉しかつた。屹と骨を折りませうと感激すると、先方も満足して、さて稿料の處は、・・・此處で二つ三つ相談があつた。結局、編輯員が、自分では、此でお取極を申すが、一應歸社の上、即日確答をし

ますからとの事で座を立つたのである。が、筑波の空へ雲が出たほど一寸氣に成る。話が極つたのではない。折返してどんな其の「確答」と言ふのが出ようも知れぬ。しかし、不出来にした處で、精々、いくらか原稿料が安く成るだけの事だらうと思ふのに、即日と言つた其返事が、翌朝に成つて届かない、氣が氣でなく、心では熟と信心をしながら、起つ居つ待つて居ると、返事どころか日中暑いのには、本人がわざ／＼見えた。私は煽いで上げたかつた——其の人は言悪さうに、自分は昨日のお約束の通りにと、種々心づかひもしましたけれども、社では、もう少し（と額を言つて）……だけに願ひたいと言ふが何うかと言ふ。見得も外聞も最うない、可し、働きさへすれば、三月は食へる。……で、結構です、と潔く返事をする、其人も喜んで、挿繪、組方など打合せを済して歸つた。

精進潔齋して、其場からでも机に向ふ料簡だから、行水などは待つて居られぬ。……背中に刺青があらば龍を顯す意氣組で、手拭を鷲掴みに、威勢よく炎天を横町の錢湯へ飛込んで歸ると、禪は洗つ

であるかい、おい来たとしめ直して、縁側で爪を取
つて元氣に水を打ったから鉢前も草も活々する、久
しぶりで涼しい氣で、煙草を一服する處へ、（速
達）と言ふ聲が泥を投り込んだやうに聞えたから、
ハツと思ふと、．．．果せるかな．．．
其新聞社からの郵便で、先刻編輯員．．．某參
上、お約束いたし候件は、本社に都合これあり候條、
御とりかゝりの儀は一先づお見合せ下さるべく、此
の段速達を以て申陳べ候。

あゝ、これが「確答」だ。

私は偏に、紅葉先生が戀しかつた。

其の夜の事である。．．．新派の俳優の立女形
の一人から、明夜、千駄ヶ谷の某君宅にて、徹夜の
怪談會の催しがある。御一所に参りませう、お誘ひ
にあがります、と葉書で親しく言つて來た。

久しぶりで、氣晴しにお出掛けなさい、と女房が、
夜あかしの怪談を氣晴しだと言つて勧めたほどだか
ら、餘程私は鬱いで居たに相違ない。

で、女房は箆笥の底を搔廻して居たが、やがて戸外へ出て行くと、暫時して、白地の絣を一反、上包みのまゝ持つて歸つて、曆を見て、……翌朝早朝に成つて縫ひはじめた、どの單衣も洗ひざらしだし、羽織はあるが、べんべらだし、會へ行くのに、それでは餘り暑くなるしいから工面をしたのださうである。

唯もうぐつたりして、お惣菜煮の葡萄豆で、お茶漬で腹を萎して、家の内でも日蔭の方へ、どたと倒れて、向うの空箆笥の前に針を運ぶ手を視めて居る心の裡は……兩國へ納涼に出掛けるとも言ふなら知らぬ事、新宿はづれの怪談會へ、晴着だと思ふと、縫つてる白地が、何帷子とか言ふものに見えた。

鶴龜々々て……女形ではあるが、侠で威勢の可い事は、雪のだんまりに出さうなのが、浴衣がけで誘ひに來た。

新宿で電車を下りて、追分を抜けた薄暗い處で、連の立女形が思ひ出したやうに、

「あゝ、——新聞から貴方に小説をお願ひ申したさうですね。」

「……」
 「彼社の演藝部の記者からお言託がありましたよ。……新派の私たちの一座に適合りさうなものを成るべくはお書き下さいまし、社でも願つて居るツて事でした。」

と齒ぎれの好い調子で言つた。

此方は其の人にはないが——忽ち血を吸はれたやうな氣がして、唇は寒かつたが、漏らす處のない便りなさに、つい昨日からのいきさつを委しく話した。

「……と云ふ始末です——急に斷つて來たんですがね。——一寸、理由が分らないんですよ。」

「妙ですね。」

「ですからね、他に、社に何か都合があつて模様
がへになつたのなら、些とも構はないのですが、誰
か、私に敵意……は可いとしてゝす、悪意を
持つて居るものがあつて、平く言へば水をさし
た……さしたものがあつて、此からの
事もあるし、よく考へなけりやならないと思ふので
す。」

「まさか……そんな事はありません。」

「でもね、しかし、止める分は、どつち道可いと
して。」

と見得を言ふ。何、可い事があるものか。

「後々の心得のためにと思ふんですが、貴方は、
演藝部の其のひとと大層御懇意だつて事ですから、一
つ内々で様子を訊いて下さいませんか。」

「え、成程。」

「……もしや、稿料の方がまだ高價いから

と言ふんなら、それは構ひません。．．．新聞も書つて見たい處ですから。．．．それに、社の方の註文なら、．．．舞臺に都合の可いやうに拵へても見ませうから、」

あゝ空腹さには替へられぬ。藝壇が、もしそれ、小兒の喧嘩だつたら、僭越ながら、二挺の斧は兩手に揮らうと思ふのが、甲州街道の短夜の並木の出會に、對手に向つた弱さを見よ。．．．尤も立並んだ其の立女形は、面は史進にして、體は魯智深なんだから、強さも強し面白い。

串戲はよして、そのかはり、百物語の會に行くのに、此のくらゐ頼もしい侶伴は一寸あるまい。尤も此の人と一所でなかつたら、當夜の不氣味さに、どんな目に逢つたらうも知れぬ。――それできつてさへ、私はあとで煩つた。

のつけに度肝を抜かれたのは、催主の郊外の住居で、暗い路を辿つて着くと、主人と私たち二人のほか誰も居ない。十四五人は集る處を、種々の事情で

皆不參ださうで。．．．．小सान卓子臺に凭かゝつて其の斷りの葉書を一枚づゝ開いて見せるのが、何うも皿の數を數へるやうで寂しい。處へ、ちよろ／＼と出て來た四つぐらゐの男の兒がある。脊が侏儒で、手足が瘦せこけて、はち瓢を乗けたやうな大きな顔が蒼しよびれて、ぶくりとして、圓い白眼がどろんとして、黄色い口が、耳までぱくりと開いて、しかも額が皺だらけだ。此兒が、客珍しさに踊り跳ねるのだが、頭の重さに、よち／＼するから、眞夏の事で――奥の障子は開放してあつた――柱から柱に四隅を傳つて、ドンと打撞つては、よろ／＼と座敷の眞中まで退つて來て、またドンと一方へ打撞つては、よち／＼と後退りに退つて來る。

主人は澄して團扇を使ふし、私たちは顔を見合せた。

少時すると、下谷廣徳寺前の古道具屋だと云ふ．．．．．煤の中から出た様な男が來て四人に成つた。

「さ、會場へ参りませう。」

と用意の提灯を立膝で點して、

「君は、それを持って下さい。」と、右の古道

具屋に座敷から、もう一つ土瓶を持たせて、主人は

臺所口で、細君の渡した中皿の上に、風呂敷を掛け

て、團扇を二三本置添たのを片手に、片手にビー

ル瓶を二本提げて、

「さ、何うぞ。」

と言つたが、勢、立女形が先へ立つて、格子戸を

開けた處を、提灯と共に細腰で、スツと出た。

其處を、背後に暗い電燈を背負つて、瓢形の大きな蒼い顔ばかりが、がくりと俯向いて、じろりと出額で睨んで、糝のやうな指を嚙んで居た、上框の瘦せた兒の顔を今でも忘れない。――後で聞くと、故と餘所の兒を借りたのだと云ふ。

さて杉垣について、探り足で行く間も、草が茂つて、會場も、背戸に原を背負つた倒れた木戸に突支棒をした草の中の古い空屋で、六疊の濕けた破れ疊の眞中へ、洋燈に其提灯の火を移したのであるが、古道具屋の順さん――順さんと言ふのが、商賣柄、茶の心得でもあるかして、口をへの字に、上目づかひで、鹿爪らしく蠟燭を睨んで、もの／＼しく、洋燈の心を熟と撓めて、ちよろりと點けた。ぼつと燃えた工合が、魔を招ぶ灯の、此が式法かと顔かれる。

奇特な事には、お化の會に、卓子臺でもあるまい

と、蝶足の膳に箱火鉢、薄が覗く濡縁に、今戸の豚が用意をしてあつて、やがて陰氣に談話をはじめた。

立女形は人も知つた話ずきだから、先づ口火　――

怪談であるから線香の灰の落ちるやうな　――

口火を切つて、續け状に二つ三つ繋ぐうちに、短夜は十二時もいつしか過ぎて、早や丑満。天龍寺の鐘がゴーンと風の死んだ真夜中の空を其の龍の這ふが如くに傳はる。・・・・・時分は可しと、眞打の主人がはじめた。・・・・・此人は左門町の組屋敷あつとを通つた木瓜、山吹の春の日中。・・・・・四谷怪談の妖靈を其のまゝに見たと稱ふる人で、様子は一寸牡丹燈籠の新一郎に似て居るが、いつか青梨を袂からころんと出すと、人魂だと思つて藝妓がキヤツと一云つたくらゐ、鼈の怨念などは、湯銭と一所に番臺へ載せさうなのだから、話も身に沁む。――

何よりも、此の會場は、恰も此の土間の下あたりが、四谷怪談の妖精が、本所から夕立の中を宙を飛んで来て、倒れて無数の蛇に成つた、昔の南瓜畑に當るらしいと言ふのである。

蒸暑いけれども障子を閉めた。

私は便所に立った。が、手を洗はうとすると、水が粘々と生暖く手に絡はる。ゾツとして障子越に透かすと、血ではないが、青いほどの腐り水だ。

可厭な心持の、重い頭を横縁から、覗かして、風に當らうとして見ると、八重葎を十坪あまり離れた、此屋に就いた物置の、眞暗な、埃と煤が霜柱のやうに堆く積つた裡に、海鼠が潰れた大きさで、どろりと、三ヶ所ばかり、薄ぴかりに光るものがある。あゝ、物置の中に人魂が見えると、附元氣で言ふと、出ましたか、待つて居たと、立女形は笑ひながら座を立つた。が、主人は腕拱をして、障子に凭掛つたまゝ、

「それは其の……晝間、あけに来て見ました。鼠の死んだ奴を猫が食つて、其處へ反吐を吐いて居ましたよ。」
と澄して居た。

私は口に手を當てた。猫の……其の吐く病

が流行る處へ……鼠のよろしくない方も、横濱までは来て居たのである。

「一杯景氣をつけませう、頂戴しようぢやありませんか。」

九紋龍字は魯智深で、そんな事には驚かない、立女形も、しかし景氣をつけようと云つて、例のビールの瓶を取つた。……勿論此方から恚う出ないでは一つめしあがれとも、何とも、嘗て主人は言はないのであつた。

其の主人は、恚うして居ると、種々な魔ものが見えます、と云つて、端然と坐つて、右の、腕拱をして、草臥れた夜汽車の如く、破れ障子に頭を押着けて、後腦で棧をこするやうにして、薄目で眠つて居た處、と心着いたらしく、

「其は、其の水なのでして。」

薄目で言ふ。

「……
成程硝子杯がない。」

「土瓶へ加します分ですな。」

矢張り薄目で、

「また一つ……それでは私がお話をしませうかな。」

と引入られるやうな陰気な調子で、

「然も此は實驗談でして、保證をしても宜しいのですかな。」

とはじめる。で、自分が語つてるうちは、曲りな
りにも薄目を開いて居るのだが、一段果てゝ、道具
屋の順さんなり、立女形なり、また私が何か話すと
成ると、件の端坐のまゝで、すや／＼と眠つて居
る。……馴れたもので、一順して、番に廻る
時分には、屹と詠へたやうに薄目を開けて、

「また一つ……それでは私がお話をしませうかな。」

と引入られるやうな陰気な調子で、

「而も此は實驗談でして、保證をつけても宜しいのですかな。」

とはじめる。……様子、何となく、もの
凄^{すご}い。最^もうやがて、妖^{えつ}怪^{くわ}退^{たい}治^ちの武^む者^{しや}修^{しゆ}行^{ぎやう}が顯^あれさう
な處^{ところ}を、古^{ふる}道^{だう}具^ぐ屋^やの順^{じゆん}さん、坐^す直^ちつて名^な告^{のり}を上げ
た。――此^この順^{じゆん}さんは講^{こう}釋^{しやく}が旨^{うま}いさうである。い
や、講^{かう}談^{たん}の速^{そく}記^きを、老^{ろう}若^{じやく}男^{なん}女^{にょ}、其^{その}表^{ひょう}情^{じやう}を以^{もつ}て讀^よみこ
なすのが得^{とく}意^いださうである。

「それは、手^てに入^いつたものでしてな。」
と主人^{しゆじん}も薄^{うす}目^めで見^みて保^ほ證^{しょう}した。

私^{わたし}たちは、せめてもの事^{こと}に思^{おも}つた。

火^ひ鉢^{ぱち}を引^ひ寄^よせ、土^ど瓶^{びん}を下^{おろ}した。――勿^も論^{ろん}火^ひはな
い。――盆^{ぼん}を伏^ふせて、其^その上^{うへ}へ、豫^{かね}て用^{よう}意^いがあつ
た赤^{あか}本^{ほん}の古^{ふる}雜^{ざつ}誌^しを、大^{おほ}きな懷^{くわ}中^{ちゆう}から出^だして、ト頂^{いた}い
て、ポンと載^のせる時^{とき}、割^{わり}膝^{ひざ}をぐいと突^{つき}寄^よせて疊^たんで
持^もつた手^て拭^ぬきで、二^につばかり鼻^{はな}をかむと、扇^{せん}子^すをびた
りと構^{かま}へたが、

「え、未^み熟^{じゆく}ながら一^{せき}席^{せき}。――雨^{あま}夜^よの破^や傘^{がさ}とご
ざりまして、村^{むら}井^ゐ長^{ちやう}庵^{あん}、早^{はや}乘^{のり}三^じ次^じを使^{つか}ひまして、惡^{あく}
事^じ増^{ぜい}長^{ちやう}のお物^{もの}語^{がた}り。」

と掠れた咳とゝもに調子を沈めると、洋燈の心を、
ぐいと落した。

「兄さまよ、兄さまよ。――」と心
細い、しはがれた女の聲。

「眞暗なる處、物置同然の二階、階子の口よりい
たして、泣の涙のために、目を泣潰しましたおそよ
が、唯々、娘に逢ひたさの一念、痩せおとろへた顔
を出しまして――兄さまよ、兄さまよ。――」
――三次見ねえ、あれだぜ――

と忽ち男の聲で言ふと、古道具屋の順さんは、煤
けた長い顔を仰向けに、ぐつと天井の隅を睨んで、
白い目をぎろりと剥いた。其ツ切、口も利かず、身
動きもせず、黙つて居る。

こゝが、表情なのであらうけれども、……
まだ、ものも言はず睨んで居る。

「蛇でもぶら下つたんぢやありませんか。」と、

立てをやま
立女形は、私の耳に囁いたが、少し調子を高めて、
「鮓を頂きませう……講釋にはつきもの
だ。」

と、同じく此も、主人からは食べるやうには言は
なかつた。先刻の中皿に手を出さうとした。

「あ！ 御覽なさい、動いて居ます、布巾の下
が。」

唯見ると、線を縫ふやうに、布巾の下が蜿々と蠢
いた、——そよとの風もなかつたのである。

私と二人、言合せたやうに、身を開いて、ひよい
と背後を見ると、——こんな時は、後を見ないの
が可いのださうである。——次の室の敷居に、二
條、兩方に並んで、同じやうな蛇が、二つ鎌首を出
して居た。

後は想像に任せる。……主人は今夜ぐらゐ
出来のいゝ會はないと言つたが、朝露に漸と蘇返つ
て、ひよろ／＼と甲州街道を引返して、追分の青物

市を通る時、しらんだ東雲に、さながら草市の中を
亡者の彷徨ふやうな氣がすると、立女形の顔も青か
つた。

家へ歸ると、今朝に限つて、亦嬉しさうな顔をし
た女房に、碌に口も利けないで倒れて寝た。

其の日の夕、其の夕。海から来る、雷は凄いと云
ふのに、剩へ、芝品川の空から、漆の如き黒雲が湧
いて、おびたゞしい大驟雨があつた。

線香の煙と、古蚊帳の裡に、雨戸の雲に包まれな
がら、私は息もつけなかつた。かさね／＼餘りの事
に、格子戸を敲き破つて、しもげた檜の青いのを、
其のまゝせめてもの店にして、女房と二人で、白玉
でも賣らうかと思つた。

雨があがつた、風の涼しい、枕頭へ、小判がこぼ
れた。いや、折目のつかない紙幣が並んだ――
夢ではない。

女房が身賣をしたのでもないので、不斷よく遊びに見える、美術學校の學生で、年紀の若い、私の愛讀者――御贖肩がおなじく貧乏なんだが、其の後援者に成つて居る人から、金策をして來たのであつた。

善いにつけ、患いにつけ、年下の人に金子の相談をすると言ふ事は情婦に向つて無心を言ふに齊しい……此のくらゐ情ない事はないと思つて居るにも係らず、よくせき故に、つい耳づたへに愚癡を漏した事があつたのである――

「……札の辻あたりから、激しい驟雨に成つたんですが、品川で電車を降りると、ひどい大雨で、それに風が吹きまくつたものですから、御殿山へ上らうと言ふのを横飛びに停車場へ駈込みました。」

先刻の大雷雨の時である。品川の空の可恐しい暗

さにつけても、聞くだけで、私は身體に震が来て、
其の深切と苦勞に涙ぐんで……

「いゝえ、……今日ききましたのは、此のた
めではないのです。――金子は昨日請取りました、
今日のは私の勝手です。」

と打消した。が、しかし、好意ながら、問ふに落
ちず、語るに落ちて、全く私のためだつたことは、
あとの話で自然分る。……

――聞くと、美術學校の學生が、餘り驟雨の激
しさに、品川の停車場へ避難した途端である。志し
た御殿山の雲に、眞暗な叢樹立へ紫色の火の柱が閃
然と立つたと思ふと、其時、雷がさがつた天地は一
面に、眞蒼な金属製の網を颯と打つたやうに見えた。
同時に瀧を流す雨が停車場前の廣場へ洪水の如く泥
波を立てたと見ると、構内の三和土へどぶ／＼と鳴
りつゝ流込んだ。辻の電車も影法師の如く、潛水夫
に似た運轉手を突立たせたまゝ立すくんで、四邊に
人の氣勢もなかつた。そんなに雷を恐れる方ではな
いが、餘りの事に人をたより、また人にたよられた

と見える。．．．心付くと、婦の背に、繁吹に濡れた袖を合せて、二人ぴつたり、待合室の隅に附着いて立つて居た。――其處には學生と唯二人であつた。

「ひどい雷様でございましたね。」

「ひどうございました。」

とはじめて口を利いた。學生が見ると、其の婦は、白縮緬の蹴出しの、しつとりした、裾を端折つて、吾妻下駄を素足に穿いて、紺地の浴衣に、豆絞りと黒繻子の腹合の帯の幅狭に見えるのを引掛けに結んだ、腰に、風呂敷包みをつけて、三味線を両袖で抱いて、濡々と立つて居た。色の淺黒い、鼻筋の通つた、口許の、それは／＼優しいのが、姉さん被りのほつれから、はら／＼と鬢を亂した。．．．年は三十四五ぐらゐだつたと言ふのである。

聞く、私も、門附の婦だとすぐに認て取られた。

今に成つて、往來の人も、濡鼠のやうに、ばら／＼と飛込んだ。――學生はそれなり目禮ぐらゐで、

洋傘を擴げて、御殿山を志した。

夏の日もとつぶりと暮れた。望は達し、用は足りた。が殆ど、魔の砦が、奇蹟なす黒檀の塔を下るやうな思ひで、雷のあとの御殿山を宵暗に下りて來ると、ちら／＼と青い、影も燈も大い、不知火のやうな電燈の微な光を、停車場前の大雨のあとの流の海に、藍を解いた如く涼しく視た。坂のつまりの、まだ其處は暗い、角を引込んだ蕎麥屋の前を通ると……

「もし……もし。」
と白いやうに呼ぶ婦の聲。――同じ處に人通りはなし、振返ると暖簾の陰に、上端に腰の淺い、裳の色も白縮緬が、ほのめく夕顔に聲ある如く思はせた。

肩ですぐに暖簾を分けると、先刻の顔が可懐く覗いて、

「貴方。」

と言つて、すつと寄つた――
學生は「逢つた

事はありませんが。「と断りを言つて、繪に描いた辻君、夜鷹に取られたやうな気がしたと言つて話す……」

私は偏に聞惚れた。

時に其の婦が、學生に、少々お聞き申したい事がある、手間は取らせないから、と蕎麥屋の土間へ連込んだ。連込まれた方では、風采は流れものゝ門附だけれども、優しい人可憐い婦の調子が、否やは言はせないばかりでなく――別に然うしたものはありはしないけれど――行方の知れない姉か、若い叔母の美しいのにでも逢つたやうな氣がしたさうで。

さて學生を向うに坐らせると、婦も端折を下して、おなじく上端であるが、對向ひに成つて手拭を取つた。――引詰めた総髪そうがみの銀杏いんげい返しに結つて居る。色も一體は白いのが、此の境遇きやうぐうだから日にやけたらしい。言葉にも時々一寸訛まじが交つた。――どんな場末の裏長屋うらながやでも東京とうきやうに住みついて居て、町、小路を流して歩くのではなさうで、通りすがりの漂泊ひらひに、宿場しゆくばを稼かせぐ旅藝人たびげいにんと云つた様子やうすが見えた。

ものには馴なれて居ゐるらしい。……連つれが、客きやく

が、来たならば憊うと、はじめから詔へが通つて居たらしく、顔を合せてから注文はしないのに、すぐに種ものが顯れて、一銚子ついて居た。

「まあ、お一つ。」

學生は、些とも飲まないのだから、杯を受けたゞけださうであるが、婦は利ける口と見えて、最うはじめから焼海苔で一合付けて居た。

で、あらためて、其の不作法を詫びながら、實は學生の歸途を待つて居たのだと言ふ。・・・何處へ行つて、何時歸るとも何とも話しはしなかつたのに。しかし、白の蹴出さへ暖簾を差覗くやうに、店の突端にさし構へた心組はよく解つた。

待て、そんな事は何うでも可い　――　處で要談である。

「貴方、御用事は調つたんでございますか。」
と、前屈みに、先刻の大雷雨の凄じかつたことなど、つい通り時候の話をして煙草を喫んで居たのが、

煙管を斜に胸へ引いて、居坐を直しつゝ訊いた。

「お心通りに、……失禮ですが、御用事は調つたんですか。」

唐突の間に、學生がためらふ處を、疊んで訪ねた。此が要談であつた。

「調ひました。」

と學生が答へた。――即ち、私の枕許に並んだ、其の若干の紙幣の事なのであるが。――學生は其の時、思ひも懸けない訪ねやうに、聊か希有と思はなかつたのではなかつたけれど、婦の人情と深切が、ほとびるばかり、其の色に表れたのを視て、確と答へた。勿論、隠す必要は何もない。

婦は心から嬉しさうに、「あゝ、それで安心しました。あんなにもお思ひなさいます御用事がもし、お調ひなさらないやうでしたら、足らはぬながら、私が御相談相手に成らうと存じて、お待ち申したのでございます。」と言つて、一寸四邊を見た

が……。「人殺しまでは出来ないでも、盗みぐらゐはして上げようと思ひました。」と、すつきり言つて、

「……尤も、こんな身體ですが、身を賣つて、それでもお金子に成らない時の事ですよ。」

と附加へた。……それが學生の耳に、此の婦が、暗夜に、月夜に唱ふであらう、宿場の店行燈、藁屋の門に立つ時の、淨瑠璃の章句を聞くやうに、悚然とするほど身に沁みたばかりで、敢て不自然にも、誇大にも聞えなかつたさうである。

思はず、肩を聳やかして、膝に手を堅く成つた學生の、全く友人の入用のために、金子を借りに行つたのであるが、何うして貴女に分りましたか、と言つたのに對して、よく／＼思ひ詰めておいでなさいました事は、まだ其の音も留らないのに、いま雷の降つた黒雲の少し白く成つて渦を巻く山の方へずん／＼上つて行きなすつたのでよく解つた。……内へお歸りか、他へお出掛か、それ／＼は、旅で苦勞した年上の女が見ればよく解る。……

「それですし、大概の用は金子で片が附きますもの。」

と言つた。――それにしても、「學生さんの貴方に、そんなに身に成つて心配をさせる、果報な方はどんな方。」と、もう打解けて、莞爾して聞かされた時――

「主人や女のためぢやありません、實は小説を書く方のお手傳ひです、と言ひました。」

――と學生が、私に更めて話した。――

「蕎麥屋に、待つうちに讀んで居られたゞらうと思ひます、其の御婦人は、紅葉先生の紅葉集をも持ちました。……」

爾時、學生は、頬の窪むばかり氣を入れて、私の顔を見て、身に沁むやうに襟を合せて、

「其の書物を見ましたものですから、差支へはなからうと思ひまして、貴方……貴方の名を其の御婦人に申しました……申しますと、……（あら、慶ちゃん。）ツて、其の婦人の方が……」

「おゝ、お澤さん、姉さん……」
 と私は思はず、故郷の従姉の名を言つた。……
 ・ものに動ずれば夕立の時とは違つた意味で、私は顔の色も變つたらう。……此の時の金子も、また違つた意味で、お澤さんが貢いでくれたものゝやうにさへ思ふ。其の従姉は、葦原煎餅と稱ふる、温泉土産を賣る商人へ縁着いて居たのである。が、近頃旅藝人とか、行商人とか言ふ流れ渡りの旅の男と駈落したと風のたよりに聞いて居た。……

（以上 除蟲菊。）

「ちよツ、馬鹿にして居るよ。何だい、馬鹿にして居るぢやないか。」

と築野が、聲とともに投出すと、志摩慶吉の校正刷は、棒消を啖つた十幾行のインキを赤く翻してバリと落ちた。

「何、……しと、人殺しは出来ないまでも盗みを……殺されて堪るものか。……盗みをするたツて、私ん許を目的にしたんだらう。姉の、あの意氣地なしが、何だつて餘所の屋が狙へるものかね。馬鹿にして居る……」

と甚しく癩癩を突張つて呶く聲が、應答のないのと、煽風機の風に掬はれる張合の無さに、膝を揉んで、朱鷺色に白い處を亂して焦れたが、はら／＼と立つて卓子臺を向うへ廻ると、ぎいと煽風機を邪険に捻りあげて、其の手で強雲の斜違ひに寝た肩を敲いた。

「一寸、馬鹿にしてゐるつて言つてるぢやないの、眞個に……」

「むうむ、いや、然う言ふ譯ではないのぢやが、熱心の餘り虚空藏菩薩の夢を見たい。」と股まで毛だらけなのが起上る。

「いゝえさ、提灯屋の書いたものなんか、讀むうちに寝なすつたのは、本望だけれどもさ。」
と言ひ掛けて、築野は、聊か自分にも見當の着かないやうな目をしたが、

「くだらない身の上話の中へ持つて行つて、私の姉の事が書いてあるぢやあないの。」

「愚にもつかん所謂モデルとか云ふ奴ぢや。・・・此は失禮ぢやつたかね。貴女の姉さんは、いゝ婦ぢやと言ふ話しぢやね。」

「は、然やうでございますとも、見せたいわ。汚れ腐つた白禪でさ。汗だらけの單衣を引張つて、フンベこノ、三味線。・・・門附の風ツたらないぢやあないの、面汚し!。・・・それ、先生にも何時か話したぢやありませんか。いゝ年をして、藝妓もした癖に、色氣を今知つたやうに、旅廻りの淨瑠

璃屋だか、でろれん語だか、わけの分らない十年も
年下の若藏と駈落をして、駈落もいゝけれども、不
義をしたんだから、他國へ遁げたつて、門附も出来
やしない。――亭主の煎餅屋は見掛け次第、斬る
の突くの、鱈にするのつて血眼でせう。そら・・・
・若藏の在所だとか言ふ、播州姫路の木賃宿の鼠
の巢に潜つて、裸體で震へて居た處を、私が行つて
濱へ連れて来てさ――姉ばかりかと思ふと、芋の
蔓に繋るやうに、瓢箪野郎が附着いて来てさ。仕方
がないから、追廻しに使つて、風呂でも焚かせよう
と思ふと、お澤の奴が――姉の名ですよ――
お汁は寶澤山　な熱い處を装つて、朝から野郎の
お給仕をするんでせう。寢床の上下しはもとより、
内の老夫さんの肩一つ叩きませうとも言はなけりや、
私の脱放しは振返りもしない癖に、野郎の禪まで洗
濯をするんぢやないの。若旦那扱ですもの。――
今日、たとひ遊藝でも、人の師匠として、お嬢さん、
奥さん方、立派な紳士たちの出入をなさる家として、
物置にも納屋にも置けたもんですか。――

「尤も、蘆原の煎餅屋の亭主の方は　――　老夫

さんがまだ達者のうちだったものだから、ごぼり／＼咳きながら遙々出向いて・・・きれいに手切つて来てくれたんですがね。其かつて金子ですよ。金子ばかりぢやあない。其の劍幕なんですもの、老夫さんが以前、煎餅屋の主筋だったからこそですよ、え、先生・・・それから思ひ附いたつて譯でもないけれど、年紀下の其の野郎は、――今は落魄れたけれども、もと姉がお世話に成つた、お主の若旦那で、それを貢ぐために、姉が苦勞するんだと・・・しみたれた風體で居るもんだから、世間體は忠義ゆゑと云ふ事にして、横濱の家に置いたんですがね、何分にも先刻お話ししたやうに、野郎の禪を洗濯する始末ですもの。誰が見たつて様子が色に顯れますものね。――見つともないから姉に因果を含めて、野郎を敲き出して了ひましたさ。こゝで魂を入替て眞人間にお成りなさいと、姉に煙草も酒も止めさせて、まあね、しつけかた／＼、それで、料簡を鍛へ直して、眞人間に成つたら、・

・ ・ ・ 濱も彼處等人氣が悪くて、下駄泥坊が多いから、お弟子たちの下足の番でもさせて置いて、其のうち資産家の隠居の目にも留つたら、財産すぐ分配の介抱人に世話でもして、私の片腕にもしようと思つたのに、何うでせう、野郎は近所の木賃宿にかまつて居て、毎晩のやうに、裏木戸の雨垂ほどに敲いちやあ、氣障な、犬芝居の治兵衛が頬被りしたやうな風をして、三國（越前）の小春を剥ぎに来る、・ ・ ・ 煙草錢だ、湯錢だと、下へ着たものから脱がせるんだもの。・ ・ ・ 姉は痩せもすりや、着たものも段々薄く成るぢやありませんか。下つた色戀だから、竹の子の皮が草履に成るやうなものだわね。しまひにや木貨にも困つて、南京町の出端れの日溜の小屋店で、擬ひものゝ何首烏と、臙肭臍の解き賣をする世間師の店へ割込んで變な繪葉がきを賣つてるんだもの。それでもまだ腐れ縁が繫つて、お澤の湯歸りの遅いのを見せに遣ると、其の小店へ納まつて、湯上りの薄化粧で、寝衣に浴衣なんか重ねたまゝで、煙草を吸つてたぢやありませんか。男手も、借りましたさ、老夫さんの威光で、私が出掛けて、たぶさを掴んで引摺るやうにして、連

れて歸つて、彌と成つたら電報で蘆原の煎餅屋利平
を呼ぶと——言つたのにや、姉の奴、ぐうも
すうも出やしない。少し辛抱を見届けた處で、野郎
が近廻りに居ちやあ煩いから、幸ひ私のお弟子筋に、
生麥に別荘があつて、留守番を欲いと言ふのがあつ
たもんだから、上下、それでもおさすりものでも、
姉にお召の一枚も引張らせて、其の留守番に嵌込
だど、お思ひなさい。——暑く成つて、夜が来る
と、季はづれの木兎のやうに、別荘の門も木戸も明
放したまゝ飛出して行方知れずさ。……此方
や線路や六郷の水溜りを搜したものを——何う
だらう、門附状に成下つて、……何だ、八ツ
山下の端蕎麥で、焼海苔で一合で、美術学校の生徒
をつかまへて、（まあ御一獻。）もないもんだ。
提灯屋も提灯屋だ、何の状だい……………」

「お師匠さん。」

「……………御主人様も。」

「御免下さいまし。」

と隣室の女優が、一行の中から、二人お弟子がつ
いて顔を出した。

「・・・あの、此から歸ります事に成りました。失禮いたします。晚には、琵琶のお催しがありますさうで・・・是非うかゞひたいと存じましたのに、初日を控へて居りますので、思ふやうにも成りません、まことに残念でございます。」と、人氣稼業で如才はなかつた。

「いや、まだ、其の、今夜とは極らんですでなあ。」

「は、でも、お山のお役僧方に伺ました、皆さんは揃つて今晚・・・」

「あゝ、飯か。」と喚くと、ぐら／＼の欄干にもたれて、餘程寐込んで居たと見える、熊澤が猛然と目を覺した。が、つい鼻の前の、きらびやかな女優鬘に、一驚を吃して、慌てゝ立上るのがよるけ状に、裏階子へ一段低くなる横廊下へ踵を外して、板敷へ、どしん、づん、起上つて又、辻つた。凄じいものゝ音。

「おや、太夫様

「只今御歸山でござりますかい。」

「お媼さん、遅く成りましたこと。」

身延本寺の見上げるやうな山門に、あの雲に乗る石段は、日本國中、幾ヶ處と數ふるばかり切立に嶮く聳えて、遍路の道者、千ヶ寺詣などは、此處を眞直ぐに攀ぢた事を旅日記の誇とする。．．．眞下は展けて、花園の風情して、瀧を揺るやうな流が縦横に走るのに、朱欄の反橋、擬寶珠の石の橋、苔蒸す小さな土橋も架る。．．．此の小さな橋の際に、あるが中に行燈の佗しい姥の休茶屋へ、優しい手に、數珠を爪繰りながら立掛つた、太夫と呼ばれた旅の婦がある。

此は、高櫓を巖に削つて組んだやうな、其の石段を下りて來たのではない。女坂と稱ふる、密樹鬱林の中を、鷺の翼で、白く傳ふやうに、見え隠れて、こゝに下山したのであつた。

あとを送るが如く、梢風の夜風が颯と袖を吹く。・・・・

「あゝ、涼しいこと。」

と浅く床凡に腰を掛けた。吾妻下駄は曲んだが、

爪はづれはきよらかである。

「嗚ぞお草臥れでござりませう。」

「いゝえ、お祖師様のお庇でせうね、些とも草臥れはしませんでした。――其ですが思ったよりか、

お山は星ほど高いんですね。」

と葭簀越に、石段を仰ぎながら、頂いて、數珠を繻子の帯に挟んだが、その手で扇子を抜いたと思ふと、

「涼しいのに・・・」と莞爾して、

「お媼さん、では、あのお預け申して置きました。・・・」

「――はい／＼お持もの、もうお立ちでござりますか。まあ、御緩りなさりまして・・・お／＼眞に、此からが御稼業でござりますよの。」

と、旅の法界屋が着さうな古笠、三味線一挺、ならびに風呂敷包の真中を真田の打紐で結へたのを、揃へて、駄菓子棚の裏から、殆ど星明りに持出した。

「何とも、お茶代を、此はまあ。」

「お恥しいんです。」

「はあ、澤山に。」

「此處から、御免を蒙りますよ。」

包をつけて、笠を被つた。うら透く面はほの白い。三味線を袖に取ると、褌が緊つて、すつと立つ。

爪先下りの門前に、水晶屋の硝子の光、茶店旅籠の店燈、浴衣の影の賑ふ人立、月夜に祭禮を見るやうな、山の麓の世の有状を、窺れた頬にもすすきりした、頤を深く笠で透して、

「大層賑ぢやありませんか。あゝ、御本山の麓ですねえ。」

「へい、太夫様。……今晚はまた格別なのでござりますよの。……一體は、もし、此

の月は、一年中ほんに御参詣の少ない時でござります
で、こんな事は珍しうござりますのよ。それと申し
ますのが、其處な東館に逗留をなさります。東京か
らござらした、偉い琵琶のお師匠様が、お祖師様の、
一代記を語らしやりますについて、御本山から、御
身柄のお上人様方が多勢お下りでござりまして、よ
の。

「あゝ、道理こそ、上ります時行逢ひました。お
星様の光で、森の蔭で、緋や紫の生絹の姿の御出家
方。道は狭し、此の汗臭いのが（と肩をすばめて）
金欄の御袈裟に觸りさうで、勿體ないとは思ひな
がら、まことに其は難有くつて、嬉しい事だと思ひ
ました。」

「おゝ、ほんに、丁ど貴僧方の御くだりは、其の
刻限でござりましたよの。」

「まったく極樂を見るやうでした。」
と笠の中に頷きながら、

「しかし、苦界が、悟れませんか。お媪さん——

もう其處等から稼ぎますよ。」

「澤山御利益を受けさつしやりませ。」

「時鳥や、猿の聲は、お媪さん、お馴染だらうけ

れど、濟みませんねえ。もう直に御近所で、狼の聲

が聞えませうよ。」

「あれ、」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、誰方！」

三味線を袖に抱いた旅の女は、いきなり路傍の棒杭の蔭から、野獣の如く顯れて、背後状に肩を抱いた小肥りの膏ぎつた男を見た。

場所は、此の晝間、歌舞之菩薩の記者が、炎天に眞桑瓜を剥いた葎簀張を、もつと渡船場の方へ本山に離れた、巖山の裾に添つた隙である。初夜過ぎた、二十日前後の月影に・・・・・・

水の流ればさら／＼と走るが、むかし物語に聞く大きな山蟹には足が少い、鼈が出さうな澤でなし、狐狸の化けたのにしては些と當世過ぎよう。紺の紺も薄月で、セルの袴を穿いて居る。抱着く拍子に、ポカンと麥藁帽を地に落したのを其のまゝに、面を肩に伏せて、喘ぎに喘ぐ呼吸は、ハツ／＼と短いが、

髪が長い、之が鬢だと、杉の木立を狂ひ出た先刻の馬に似るのである。

鳴き残った蛙の聲も留まない處を、いきなり抱きつかれたのであるから、はじめは一寸氣を打つたらしかつた。が、袖も振らなければ、褌も亂さず、眠つた鷺が其まゝ覺めたやうに振向いた。胸に取つた三味線の胴で、頬を枕にする風情で、笠ぐるみなよやかに、

「巡查さん……あの、探偵さんですか。」

「……」

「旅籠屋の番頭さんでなし、……それとも横濱からお伴をした書生さんなの？」

「……」

「お放しなさい。」

とやゝ屹と言つた。けれども、振飛ばさうともしないので、尚もの靜に、

「私のした事が、私だつて事が、分つたんですね。」

ですがね、此處で掴へて、引張つて行つたつて詰り
ませんよ。・・・悪ければあやまるだけですか
ら。唯それだけで済むんですから。琵琶を語つて居
たのは私の妹ですから。――私は、あの女の姉で
すよ。
「

と、しかし優しく言つた。

お澤である。――山門の中の茶店から、笠越に
覗いたのは、賑の一端に過ぎない。東館は内も外も
夥多しい人数であつた。二階は廣間を打通して、僧
の好い衆たちの涼しく二輝なほかは人を拂つたが、
縁には聴衆が溢れた。道者宿もする大圍爐裡を切つ
た下階は残らず開放しだから、柱のすく／＼と見え
る處へ、充滿に詰込んで、餘つたのは玄關前から軒
下、往來に群がつて居た。歌舞之菩薩社主催、強雲
居士作、山端築野嬢彈奏。眞中に大字を以て、高祖
御一代記六曲と、軒に立看板を揚げたのは言ふまで
もなからう。本山の麓で、祖師の一代記、美人なる
琵琶の妙手が弾じて、然も法樂と言ふのであるから、
寝苦しい暑さの砌、人の集つたに不思議はない。

お澤の笠が、まだ濡れない夜露にも、早や旅に、しつとりと、人混の中を縫つた時は、其の何曲目であつたか知らぬが、琵琶は叫び、聲は咽んで、高き其の大廣間に、出家たちの法衣の袖の、幾基か煽風機に煽る法の波に、築野の面は仰向に白く浮き、唇は赤く開いて、金齒が電燈に光つて居た。

其の一瞬間である。バツと電燈の一つが消えると、星の流るゝが如く礫が飛んだ。築野の面は、首が切れたやうに、俯向いて、塗盆の如き廂髪と成つて、琵琶の音はハタと留まつた。礫は不思議にも唇を切つたのであつた。

聴衆は其の途端に寂然となつて、崩るゝばかりの動揺を起した。また忽ち然ばかりの群集にせよ、二階三階にせよ。其の居士、其の女、其の琵琶にせよ、大なる自然の目より見る時は、山の峽なる根に暗く生えた、唯色ある夜の菌である。輝ける電燈も、露に添ふ影に過ぎない。

ものゝ叶はぬ譬には、蜷貝で大海の水を干すと言

ふ。・・・しかし、礫つぶてを飛とばして、變へんな音樂おんがくを留とまめるのは何なんでもない。

輕かるく手てを擧あげたばかりである。波木井川はきみがはの流ながれ、音急おとぎふにして、礫つぶてを投なげたお澤さはの姿すがたは、峰みねを出いづる半はん輪りんの月つきの影かげに送おくられつゝ、すでに、水みづのやうに、山やま路ぢの低ひくきに流ながれたのであつた。

「ねえ、分つたでせう、離して下さい。．．．．
分りませんか。あやまつても承知しないつたつて、
現在の姉を何う出来るもんですか。それですし、其
琵琶を弾いてる處を、あんな無法な邪魔をしたと言
つて、御出家達なり、土地の方なりが、妹のために
腹を立つて下さるにした處で　　―　　私は然うすり
や妹に詫を言つて貰ひますよ、矢張り何うする事も
出来ないでせう。」

とお澤の聲は柔かに、

「第一、こんな淺ましい、情ない態をして、人様
の門に立つ　　―　　いゝえ、今夜は故と淨瑠璃所か、
流しの撥も入れないで、唯涼みながら、月を見なが
ら來ましたがね。　　―　　妹の、あの派手と人氣を、
猜んだんでも嫉んだんでも何でもないんです。ぢや
らん、ぼろん、ウゝゝ、キヤアなんて、何うだらう、
田舎の葬式に牡丹餅が詰つて、氣絶けるやうな聲を
出して、金齒を燦々、目を白黒して居るんだもの。
餘り可哀で、氣の毒で、恥しくつて、づう／＼しさ

もづう／＼し、視ても聴いても居られないから、清涼劑の印籠を投げたんですよ。――吃驚するほど手際よく、絃も咽喉も留まりましたから、あゝ、悪い事をした。梟の聲が可厭だつて、何も人に構った事ではないと思つたけれど、ですけどね、鳥の方は何も人間に聴かせようつて鳴いてるんぢやありませんまい。……それなのに、好嫌をするのは人間の我儘でせうが、妹のは聴かせるために遣つてるんだから、礫の一つぐらゐ投げてても可いと思つたんです。――看板を御覽なさい、何よりお祖師様に失禮ぢやありませんか。其の御身の上を語るのに、あんな變な音色を出してさ――でも唄つて居るのが、其ですからね、私は路傍の石を拾つたけれど、立つてる人の足の傍だし、泥が着いて居ましたから、清い流でよく洗つて、手拭で拭いたんですよ。水晶屋の電燈で透すと、透通る玉のやうな石でした。可ござんすか。貴方が土地の方ならば、土地の方に、此の事を然う言つて下さいまし。……妹のお連れだつたら、妹の方の人たちに、然う言つて下さいまし、お分りになりますか。――

「分つたです。雖然、……誰にも言はんで
す。」

と、蛭の落ちる如くぼたりと離れた。が、血を吸
つた後ではないから、はじめより痩せたやうに見え
て、顔を上げたと思ふと、俯向いた――熊澤常
雄であつた。

此の時、お澤のした事が、可恐く彼を感激せしめ
た。お澤は熊澤が手を離したのと、其様子を見ると、
踞んで、手を撓やかに、夏帽子を拾つて、軽く土を
拂つて遣つたのである。

「お帽子。」

引掴むやうに、をのゝき取つて、髪を搔拂つて叩
頭をした。

「僕は、私は、或意味で、御令妹の従伴でした。
しかし木賃宿へ下げられたです。ウ又憤慨に堪へん
のみか、蒸暑いのと、蚊が酷うて寝られんので、む
しろ富士川を泳いでも夜通し歩行かうと奮起して、
飛出して来たですから、只今のお話の件には、非常

に關係があるべきで、然も聊もないのです。――
憤悔をしますが、豊艶なる御令妹が、壮に媚態を發
露さるゝものですからして、鬱勃たる衝動に堪へな
い處へ、此の山間、溪流の無人の境に於て、貴方を
見ましたものですから、尋常の門附と申うてからに、
性、性の本能の、爲、爲に……

「あゝ、煩惱ですか。」
と笠の目洩るゝ片類の微笑……何となく三
國の小春の職見えて、

「お互ですわね。」
と、しんみりと言つた。が――小春さん、姉
さん――之は些と當世に疎かつた。

「よく仰有つた。貴方は男です。でも……
顔を御覽なすつたんぢやなし、こんな風俗だし、私
でなくつても、女なら可いんでせう。此頃は、其方、
此方稼がありましたから、失禮ですが一度ぐらゐら
ゐ、お小遣をあげませう。あとへお引返しなすつて
も可し、たしか渡船場のあたりに、お役に立ちさ
うなのが居たやうですよ。」

少時すると、月を流すやうな崖の上を、流れに影を揺がしつゝ二人静に歩行て行く。・・・

「不思議な御縁と言へば御縁ですねえ。――慶
 ちゃんの事で、貴方が此地へおいでなすつて私がお
 目に掛るんですもの。――いゝえ、此方が氣樂で
 す。妹と違ひましてね、あの慶吉は私が世話に成り
 たいと言へば、三膳の御飯は一膳分けてもくれませ
 うし。・・・（煙草を喫むな、酒をよせ）とは
 言ひますまい。閑があれば淺草などは案内して、お
 蕎麥の蒸籠ぐらゐは御馳走もしてくれませうけれど、
 細君がありません。女房さんがね。いまはあの慶吉
 ー ー ー 逢つた事も、見た事もなし。・・・
 どんな氣の優しい人だつて、其の方に悪いわね、貴
 方門附の従姉ぢやあ。ー ー 遠慮をするのが世間の
 義理です。ですから音信不通で居ます。でも仲よし
 の慶ちゃんですから、私が其のうち、並木の肥料に
 成る時は、たとひどんなに離れて居ても、三味線草
 の夢ぐらゐは見てくれませうし、私も見せます。」

と草にかくれる風情して、お澤が言つた。薄が茂つて、路が蜿つたのである。川は大きく、お澤の影に分れて流るゝ。

「感激しました。——お話を戻すですが、歌舞之菩薩へ掲げられると成れば、提灯屋が忽ち繪馬描だ。……それだけでも出世ぢやあないか、原稿料が何だ。」と言ふ意味の手紙を、志摩さんに突附けるやうに、と言つて、こゝに託つて居るですが、既に木賃宿へ追放された際からしましてからに、再び社へは歸らない決心をして居るです。……自分に思ひ當ると同時に。でも私が志摩さんに向つて取つた手段は、餘りに侮辱し、輕蔑して、實に申譯のない氣がします。で、此の御令妹の手紙のかはりに、貴女のお供をして、無論、其の三味線も擔ぎます。荷物も背負ふです。甲州街道、東海道、御都合次第、徒歩をしても、東京へお送りしまして、貴女を志摩さんに逢はせる事で、幾分の償をしたいと思ひますが、如何でせうか。」

「一寸。」
お澤は月にそよぐ蘆に似て、細流を裾に立留つた。

「お安（やす）（筑野の實名）の其の「提灯屋が繪馬だ。」とか言ひましたね。その手紙を私に下さい。そして、其のかはりにお託け申したい手紙を私が認めます。嘘にも一所に東京へ歩行いて行かうとお言ひなさる、お志しですから、今夜は此から私の疍へ来て下さい、尤も野宿なんですよ。其處で最一つ、慶ちゃんの家へ行かない譯の、ものをお目に掛けませうね。其處には、私の汚れた胸が、汚い腹が、狼に食殘された死體のやうに成つて、轉がつて居ますから。——たしか今日の約束では、此の邊だと思ひますが。」

と笠を取つた月下の面影。露じとりして艶かな、おくれ毛をば拂つたが、

「あら、恥かしい月夜なこと。」

お澤は伸上るやうにして、「おゝい。」

と呼んだ、聲が透る。……太子ヶ嶽と、富士川と、且つ高く、且つ鋭く、名と流の響くのみ、月の他には影もなき、夜中の身延街道である。聲を透すに遠慮はなかつた。

「おゝい、おゝい。」

唯、其の聲に誘はるゝ如く、螢が一點、ふは／＼と、前途から細流の上を來て、お澤の白い襟を照すと、驚いたやうに、ぴかりと光つて、スツと本山の方へ影を曳いて流れた。

志摩慶吉は蚊帳を掲げた。

本山の麓に、東館と軒を並べた、島屋と言ふ旅館の二階の廣間なのである。

志摩は、．．．．．恰も其の夜其處に宿つて居た。

一つ蚊帳には意氣な女、また男の連も、すや／＼と寝て居たが、慶吉一人、衣桁を探つて、帯だけしめ直して、二階を下りた。

「寝られないから．．．．．歩行いて來ます。」

不寝の番に然う言つて、カラ／＼と大戸を開けて山へ出た。

志摩には、妙な経験、と云ふと事業らしくなる。

然うでない。それよりも、もつと、心靈的超自然的と云つたやうな記憶がある。嘗て湘南の海岸に、病を養つて、心細く三年を過した。――其の二年目の秋の末から冬のはじめに掛けて、三崎街道ではあるけれど、時節柄とて、昨日も今日も旅客らしい影もなく、さびしい汐風の颯と吹く、土の佗しく乾いた砂道を、頭に小桶をのせた、脊の高い飴屋が、雨さへ降らねば、毎日のやうに、同じ方角から来て、同じ方角に、片輪車の風情して唯一人過つて行くのを見た。呼聲もなければ、謡も唄はない。腰を据ゑ、足を練つて、頭で梶を取つて黙つて行く。又さつと風が吹く。ばら／＼と落葉に交つて、木の實の轉がるやうな村の兒が、飴屋さんと呼んで集まると、「はい、はい。」丁寧に會釋をして、桶から飴を取つて莞爾して、また「はい、はい。」と優しく言つて嬉しさうに渡してさて練つて行く。――此を、屋根の破れた、欄干の曲つた二階の狭い縁から、瘦せた胸に日毎に聞いた。何となく

涙ぐましくもあれば、又慰められもしたのである。
翌年もおなじ時節に、おなじ飴屋が来て、その
「はアイ、はアイ。」 「はアイ、はアイ。」 を
繰返したのであつた。

深く心に沁みついたものと見える。其の後二年三
年を過ぎて後、東京で、夜が寝られない、夜更けと
さへ言へば、寢床の何處か・・・枕の底に
「とうい、とうい。」 「とうい、とうい」と恚う云つ
たやうな聲が聞える。神とも、鬼とも、分らない。
微な、遙な聲である。――「とうい、とうい。」
――長く餘韻を引いて、日を重ね、月を経るまゝ
に、一つの音律を形造つた。

(とうい、とうい、
とう、とう・・・い、とう、
とう、とう、――)

さびしい暗夜に、巖打つ浪が遙に響くやうでもあ
れば、月明き夜の、幽な馬士唄のやうにも聞える。

に響いた浪の音であらう、と思ふのであつた。

（とうい、とうい、

）とう、とう・・・い、とう、

とう、とうー）

まだ睡眠には入らなかつた、が、ヒヤリとするまで、此の聲が、當夜、身延山の島屋旅館に、旅寐の志摩を驚かした。ー

此の時は、すぐに女の聲に聞えた。それも古郷である。故郷の、遠い、薄青い蘆原の温泉の湯女の唄の響く、と思ふにつけて、あゝ、縁の糸は、宇宙なる、水と潮との如くに續く。・・・何處でか、遙に、何處でか、幽に、可憐い従姉のお澤が、渠を呼ぶやうに、身に沁みて、胸がうづいた。

雖然、餘りに取留がない。

或は月の本山の高峰にて、御經讀誦の聲ならずや。
波木井川、赤川の流れの音の合唱か、富士川の、あ

の渡船場に、渡船呼ぶ、それが、とも思つたが、――
大戸を出で、迫れる峡の中空に、半輪の月に問
へば、其でもなく、此でもない。――矢張り道――
筋。濃い影を曳いた、山裾の薄に立つて、

(おうい、おうい。……)

お澤の呼ぶやうに聞えたのである。

お澤が、呼んだのは――しかし自分で汚い腸
だと云つた……其の怪しげな情夫であるのは
云ふまでもない。……

處で、志摩が、こんな時分靈山の麓に来て居たの
は、遙に故郷の水を偲んで、夜半の枕に、遠い聲を
聞くにつけ、幼い時の従姉を可懐むと言つたやうな、
殊勝な、可憐しい心掛からではなかつた。いつぞや
の三ならび、さん／＼の、厄年以來の沸湯を、歌
舞之菩薩社のために飲まされた戸、憤激の餘り、賢
人哲人でない作者の癖として、當の晩方、自棄酒を
呷つた勢に乗じて銀座に泳出した足が、待合と言ふ
をかしたな島へ流れ込むと、二階へ案内した女中が、
まだお茶さへ持つて入替らない先に、澄して羅の裙
を曳いて来て、葎箆越に微笑んだ、上品な年増の姐
さんがあつた。呼ばうと思つたのが、先方から顯れ
たのだから、嬉しがつて奇遇があると、何、不思議は
ない。志摩などは違つて、ぐつと工面の可い、懇
意な友だちで、よく此家で落合ひもすれば、誘ひ合

つて一所に飲む、或銀行家が、宵から来て裏階子を一つ隔てた隣座敷に居たのであつた。

はじめ、志摩は串戯だと思つた。友の其銀行家が、此の十一時何分かの汽車で身延詣をすると言ふ。――

尤も是よりさき、出發して、岩淵から富士川下をした一組の人数があつて、其には、土地の妓の誰彼が連立つて居るとの事。銀行家は用事の都合で、これから後を追つて、東海道から行合はうと言ふのである。奇遇次手だ、お連立ちなさい、是非にと言ふ。無論、餘り唐突で、志摩は行く氣はなかつたが、杯を受けた發機で、君が行くなら奮發しようか、と言つた。――其の君たるや、友だちでなく、姐さんの事である。――實は評判の、もの靜な沈着家で、嘗て隣裏から火事の出た時、兩戸に火のついた中で、床の間の海棠の繪の掛物をはづして、涼しい顔して、冷紅、泣露の粧を見ながら靜々と巻き納めた。餘り慌てたからではない、落着き澄したので、……泰山崩るゝと雖も自若として居る。其のかはり、お天氣が悪いと仲通の買ものにもうつかり出ないと言ふのであるから、身延と成ると、一門一家評議の上、

支度に少くとも一週間は掛る。必ず、膝にきちんと手を置いて断るに相違ない、と志摩は高を括つたのであつた。處が、何と、青簾に雪が降つた。つい近い頃、百ヶ日を濟した、魚がしとかの、世に亡い旦那なるものが法華宗で、病中は本復の願掛に、榎町のお祖師様へ日參もしたくらゐ、
「身延さんへならば、すぐにお供をします。」
「そこそは申しけれど、退引成らない。此の勢に、私も行くわ、私だつて、とちよんきなが三人湧いて出た。其の勢に酒が廻つたゝめ、一分おくれても間に合はぬ、汽車に乗りはぐれて、明方を待つて飲あかした。・・・」
餘りの暑さに、途中で沼津へ下りなどして、渡船を渡つたのが日暮方だから、島家へは九時を過ぎて着いたのであつた。

白い雲が、鷺のやうに山の端を覗くと、霧か、靄か、山道を包んで這つた。

志摩は既に総門を出て、山を降りて居る。流に送られ、涼しさに迎へられ、月につれつゝ道を行く。・・・我が魂の獨り歩行を視るやうに、氣

も、うか／＼と漫であつた。

一度通つて来た道である。たど／＼しさは更になり。また家に居ては、此の山中也寝苦しい蒸暑さで、夜は更けたが、一軒屋でも、軒さへあれば、灯一つなき廂にも、月を稱ふる人聲が、瓜茄子の中を漏れた。

それも心強さに、霧の橋さへ二つまで長く渡つて、うか／＼と渡船場の方へ下りて行く。

(とうい、とうい、

とう、とう・・・い、とう、

とう、とう・・・)

あの、其の聲のする方へ　　聲の聞えたと思ふ方へ　　ー　　ー　　聲の聞えたと思ふ方へ　　ー　　ー

川瀬の音が、颯と遠い山懷を裏へ離れて、峰の雲がすつと通る。・・・月は影を拭つて、靄が光つた。

彼はハツと立停つた。

耳みみについた其そのの聲こゑを、こゝにひと聲こゑ、月に明あきかに、
鶯うぐいすの鳴なく音ねに聞きえたのか、熟ちつと、静しづかに聞ききすますと、
歌書かしよか、草紙さうしか、經典けいてんか、婦をんなの書しよを讀よむ聲こゑである。

「今一度見て参れの御意なき内、婢は心得て、他のお座敷を貰うて参るやう申遣はしましたれば少々、暇取れまする筈、おつゝ見えませうほどに、暫らく御辛抱遊ばしまし。なほ迎ひを遣はしましよ、と銚子を持ちて立ちけるが、頓て還りて、やう／＼只今見えました。」

こゝに崖暗く、水細く、夏草の露に茂れる裡に、月は雨の霰に似て、杉の葉を漏れつゝ、はら／＼と降りかゝる、古び破れた一張の天幕の下に、紅葉先生の名著の一篇、三人妻の一章を正しく朗かに讀むのである。

といま明かに聞取るまで、志摩は遠くから、聲をしるべに、案内知らぬ巖の根の、水を踏み、草を分けて、やがて近づくまゝに、聲音を忍んで、ひたとテントに摺寄つたが、彼のアラビヤの物語にありと言ふ、波斯灣を乗つたる婦人が、名も知らぬ國に迷ひ入つて、太陽と月の他は、あらゆる人も獣も

石に化したる大宮殿の奥に、一人高らかに高蘭經を
讀む聲を聞いたと云ふ。――其の光景をさへ思浮
べた。

麻布の濕つばい、羽目を密と覗くと、暗い提灯
が置いてある。たゞし、その灯は、届くまい。もの
に腰掛けた態に、見すばらしい旅の女の手にしたは、
見覚えのある一冊だが、暗誦し得と察しられる。男
が二人、却つて灯に近く、狭い處に附着いて聞いて
居た。

「……座にも着かせず一嘲弄して、其舌戦
の模様を、御前の御肴に、と山瀬は酒に舌を濕して
待つ處へ、才藏晝聞からの無理酒に傷みて、歩行ふ
ら／＼と亂次なき態度、海棠したゝか雨を帯びて、
春色今を闌なる姿……」

天幕にとまつた三つ五つ、螢の火の、露の眞珠に、
明滅するのが、婦の聲と呼吸を合せて、きら／＼と
清く句讀を切つた。

志摩は頭を下げて、文章の威徳に思はず草に手をついた。

霧の包んだ月の、天幕は薄雲を束ねたる大白象にも似るのである。

「や、何うも好いですな。これで見ると、小説も、實に面白いものですな。」

「私もな、毎晩のやうに………恚うやつて讀んでもろて聞くのんが何よりの樂しみでな、娑婆も地獄も何も思やしまへん。」

と一人が言つた。

「東京へ歸るのも最うやめです。貴下方と一所に放浪して、天幕でも擔ぎますか。今の續をもう少し願ひたいです。」

二日三日續いて聞いた、不快なりし聲が、油蟬の如く耳について覺えがある。――志摩が怪しんで、さし覗くと、其の一人は歌舞之菩薩の記者である。

呆然として夢かと思つた。

「お才さんの綺麗な處です。．．．．．蠟燭を明るくしませう。」

然う言つて、提灯を、白い手でスツと疊むと、裸火が、草の露にバツと一團の螢を集めたやうに青

い

目許よ、眉よ、唇よ。

飛ぶやうに後へ退つて、

「お澤さん。」

「．．．．．」

「姉さん。」

と、跽音を立て、衝と寄つた。

「志摩です。」

と言つた、天幕の口は、大なる佛壇を覗く心地がした。

一目視て、

「あら、慶けいちやん。」

同時どうじに揺ゆ騒れざわぐ兩ふた個たりの男をとこに、ちろ／＼と煽あふつて消きえ
さうな蝋ろう燭そくを、片かた膝ひざ支ついて、手てで圍かこつた。透すかせば
峰みねに星ほし一つ、月つきは高たかく天幕テントの上うへの眞空まそらにある。

「何故……貴方は、慶ちゃん、そんなに氣が弱いんですえ。ー 先刻からも聞いたんですけどもー それだから琵琶師なんかに、提灯屋が繪馬描に出世だなんて言はれるんです。貴方は、何だつて、其の雑誌の人が……いゝえ、大丈夫、寝て居ます。」

とお澤が言つた。言葉も心も、此の二人ばかりの話に成ると、三人妻の面白さに、幼児のやうに成つて眠い目をニつて居た熊澤も、はんけち賣（これは説明に及ぶまい）も、ぼろ毛布を引張合つて、肩を合せて轉げたのであつた。

「……覺めて居ても構ひません。ー 今では慶ちゃんに濟まなかつたと云つておいでなんだから。ですが、其の人が、もしか、自分の言ふ事を貴方が肯いてくれないと、（すぐに雑誌社を迫出されて、身が立ち行かなくなる、せつかく學問をしに出て來た東京にも居られなくなる。）と言はれ

た時に、何故判然と、（自分の仕事にはかへられない）と言つて、ちやんと撥ねつけないのです。……もしその上にも、命にかゝはる、死ぬと言はれたら何うするんですえ。婦だつたら何とします。あなたのやうだと、嫌な男に、言ふ事を肯いてくれなければ死ぬ、——と言つて口説かれた時、断りやうがないぢやありませんか。私は可厭だ、断ります。それだつて、たゞ操を棄てるだけの事です。身體がなくなりもしないけれども、嫌な奴には、御随意にお死になさいと然う言ひます。……それとも貴方、慶ちゃんは、どんな婦でも、死ぬ、と言へば、靡くと思つて居なさいですか。」

慶吉は、現に、島屋の一つ蚊帳に、七年越九年越、戀の届かないのが、すや／＼寝て居る事を思ふと、もに、冷い汗をたら／＼と流した。

「貴方のお仕事は、それだと……たゞ女の身體ほどにもないやうになるではありませんか。いたづら事をするんだつて」

大な馬蠅が来て、はんけち賣の額に留つたので、蒼い、膏じみた鼻が獅噛むと、お澤は扇子で、バツと拂つて遣つた。草の葉に、其の扇子を翻して、紅葉集を据ゑながら、

「お話にはなりません、姦通をして遁げたんだつて、對手も私も生命がけですよ。貴方は立派なお仕事をして居ながら、人間一人の生命なんか、何に遠慮をするんです。一派一藝の遊藝の師匠だつて、弟子が不埒を働けば、たとひ其の爲に身が立たなくて死んだつて、尠當もする、破門もします。斬つて棄てると同じです。それなのに、貴方、慶ちゃん
は……」

「母の、母の言葉とも思ひます。」
志摩は、更に草むらに面を伏せた。

「申譯がありません。——自信がないからで、決して怠つては居りません。……一生懸命には行つて居ますが、我身を庇ふために、小説の作のために、人が社を追れると云ふのさへ、半分は嘘と

知つても突離す事が出来ません、まして、生命にかゝ
はるなんぞ。――いや、しかし未熟だからです、
修行が足りないのです。」

「修行をなさいよ。」

「はい。」

「慶ちゃん。」

と手を取つた、故郷の北の海なる霰の暗夜に、私
に抱かれて寝た時の、屏風を覗いた客の影を、海坊
主だと可恐がつた……あの優しい顔、弱い兒
が、お澤の胸にいま響くと、瀧を落して間近なる、
富士川の鋭き瀨波の音。

激しい世間に苦勞する、肩を抱いて、乳柔く引し
めて、

「瘦せたのねえ。」

「貴女も。」

と二十年ぶりの徒姉の情に、本能も、煩惱も、小
兒になり、愚に返る。

「……お身體をだいじになさいよ。」

「あゝ、貴女も。」

馬も鳥もまだ見えぬ。山かつらの東雲に、靄の下
を波の走る、富士川の渡船場口、志摩が送れば、送
られて。ー おい、来た、と男二人は、天幕を擔
いで元氣に續いた。

船頭はまだ影も見せぬ。

矢を射る流れに引傾きつゝ、底高く浮く渡船に、
朝風颯と吹添ふ時。

「足は鈍いが、 艫は早い。」

あの、熊澤の手の働きを見よ。見事に高波を切つ
て出た。中流に立つたお澤の姿は、八戒悟淨に守護
さる、波天竺の順禮の風情があつた。

「然やうなら。」

「御機嫌よう。」

櫓が棹にかはると見れば、向うの霧に早や吸す
るゝ、身延の空にありあけの月、明星が唄つたやう
に、鶯の聲が響いたのである。

【完】